
迷鏡堂の閑人さん

大山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷鏡堂の閑人さん

【Nコード】

N93710

【作者名】

大山

【あらすじ】

人間の邪な心から生じる幻魔。彼らは宿主の欲望を叶える事で、現し世に姿を得るといふ。一つの思いしか知らない、不自然な己を抱えたまま。そんな幻魔絡みの相談を、ある日、校内で一、二位を争う美人の先輩から受けた悠風。彼女は早速、幻魔退治を生業とする業突く張りの男・閑人と共に、事態の收拾を図っていく。

むかしむかし

その後姿を見た時、幼い彼女の脳裏に再生されたのは、一年前に没した母が生前にしてくれたお話。

むかしむかし、ある山奥に一人の鬼がおりました。

鬼といっても、とても気の優しい鬼で、山の動物たちとも仲良く、穏やかに暮らしていました。

時折尋ねてくる仲間の鬼は、人里に下りず、人を襲ったりしない彼の事を、臆病者と囃し立てたりしましたが、鬼は全く構いませんでした。

中には彼を一族の恥だと言い、無理矢理にでも従わせようとする乱暴者もありましたが、やっぱり彼は従いませんでした。

鬼は、今の静かな生活が大好きだったので。

そんなある日の事。

とても寒い冬の日、鬼は不思議なモノを見つけました。

いいえ、ソレが何なのか鬼は判っていたのですが、雪深い山奥に居て良いモノではなかったのです。

ソレは人でした。

それも齡若い娘でした。

男でも入らない山の、それも鬼が暮らすこんな奥まったところに、人間の若い娘が一人、半分雪に埋もれた姿で倒れていたのです。

鬼はとつても困ってしまいました。

助けたところで自分は鬼、目が覚めたとして娘が騒ぐのは判りきった事です。

かといって、このまま放って置くのも、あんまり気が進みません。

しかしその時、娘が小さい声で「お母さん、御免なさい」と言つたので、鬼は娘を拾う事にしました。

自分の命が危険な時に、母へ謝る娘が不憫に思えて仕方なかったのです。

自分の家に戻った鬼は、娘を布団に寝かせて火を起こすと、まず頭の角を隠す事にしました。

鬼の角は他の鬼より少し長かったので、何だかヘンテコな頭になってしまいました。鬼だと騒がれるよりは良いでしょう。

次に鬼は、黒くした前髪で目を隠す事にしました。

鬼の能力で髪を黒くする事は出来ても、鮮やかな目の色はどうにも出来ないからです。

出来栄えを見るため、鏡に自分の顔を映した鬼は、そこそ上手くいった事が判ってほっとしました。

けれど、鏡を見た事でもう一つ、どうする事も出来ない部分を発見してしまいました。

長年の穏やかな暮らしのお陰で、怖い顔にはならない鬼でしたが、口から覗く鋭い牙はどう見ても恐ろしいものでした。

優しく見える分、いつそう不気味かもしれません。

ですので鬼は、なるべく喋らないでおこうと思いました。

そうして目覚めた娘は、見知らぬ男の姿には怯えたものの、鬼が鬼である事には気づきませんでした。

鬼が娘を拾ってから数日後。

身体のだいぶ良くなった娘は、鬼にぼつりぼつりと自分の話を
していきました。

幼子の頃に父を、ほんの一年前に母を亡くした娘は、奉公先の
主人から縁談を持ちかけられたそうです。

相手方も良い人で、話はトントン拍子に進んだのですが、その
矢先、同い年の奉公人の少女が、店で一番高価な商品を失くしてし
まったと娘に打ち明けてきました。

なんでもその商品は、この山奥にしかない、特別な薬草だそう
です。

だから娘は、泣く少女を落ち着かせると、奉公先の主人には置
手紙をして、この山に来たと言いました。

けれども鬼は、この話に首を傾げてしまいました。

何せ、この山奥に、そんな大層な薬草はないからです。

それにこの山奥にしかないというなら、薬草を求める人間は他
にもいるはずで、長年ここで暮らしてきた鬼にもその動きが判るは
ずです。

そもそも、人間が度々来るなら、鬼はここに最初っから住んで
いません。

静けさを求めている鬼がここに家を建てたのは、騒がしい人間
が来ないところだったからです。

だから鬼は、娘が少女に騙されたのだと思いました。

思いましたが、娘が出て行く時にも騙されているとは言いませ
ませんでした。

言ったところで、どうにもならないからです。

ただ、この山奥にそんな薬草はない事、疑うなら麓の村で薬草
について訊いた方が良い事だけを告げておきました。

鬼のこの言葉に、娘は何やら難しい顔をしましたが、助けて貰

ったお礼を言うのと去っていきます。

その後姿を、鬼はズーっと見送っていました。

ズーっと、ズーっと、娘の姿が消えてもなお。

それから幾日か経ったある日、久々に仲間が楽しそうな顔を
して鬼の下にやって来ました。

いつもなら素知らぬ顔をする鬼でしたが、この日は自分からど
うしたんだと声を掛けていました。

娘が去ってからというもの、鬼は一人でいる事に少し厭きてい
たのです。

そんな鬼の様子に、殊更嬉しそうにした仲間は、にっこり笑っ
てこう言いました。

遠い町の奉公先で盗みを働き、捕らえられた人間の女が、その
直前、この山に高価な薬草があると、麓の村で触れ回っていたそう
だ。

お陰で欲深な人間がたくさんこの山奥に来るだろう。

そうすればここに住むお前は、鬼としてあれらを払わなければ
ならない。

女は無罪を主張しているらしいが、静けさを好むお前にとつち
や重罪だよな。

話を終えた仲間の鬼は、来た時と同じくらい楽しそうな顔をし
て去っていきました。

しかめっ面をした鬼を見て、ようやく彼が鬼らしく振舞うと思
ったからでしょう。

しかし、鬼が怖い顔をしたのは、仲間の鬼とは全く違う理由か
らでした。

奉公先、失われた高級品、山奥の薬草、麓の村、そして 女。

並べた単語が最初の二つと女だけなら、鬼は何とも思わなかったでしょう。

ですが、残りの二つが組み合わせれば、鬼の中で一つの仮説が生まれます。

もしかしてその女とは、前に拾ったあの娘ではないだろうか。騙した少女に罪を着せられたのではないだろうか。

女が無罪を主張していると来たらなおさらです。いてもたってもいられなくなった鬼は、何故そんな風に思うのかも判らないまま、件の女を見に山を下りました。

そうして鬼が牢獄で見たのは、あの娘の、酷くやつれた姿でした。

鬼は牢獄から娘を攫いました。

娘は初めて晒された鬼の本当の姿に、最初こそ恐れて暴れましたが、逃げられないと知ると気を失ってしまいました。

あの時拾う切っ掛けとなった、母への謝罪もなく。

鬼はあれが、強く生きなさい、という娘の母の遺言に対しての謝罪だと聞いておりました。

ですので、それがないということは、娘が死にたいと思っているのだと判りました。

でも、鬼は娘が死ぬのは嫌でした。

だから鬼は彼女の命を助ける事にしました。

町を転々としながら、ありとあらゆる災厄から娘を守りました。娘が嫌がっても、鬼はそうし続けました。

娘の知らない町で、娘の過去を知らない若者が彼女に恋をし、彼女がそれに応えてからもずっと。

娘が子を生めばその子も守り、娘が老い、死の床で不安がれば、誰もいない時に手を握って約束しました。

お前が死んでも、私はお前の一族を、この命尽きるまで守ろう、と。

鬼の言葉を聞いた娘は涙を一つ落とすと、ありがとう、と鬼に言いました。

そしてそのまま、静かに息を引き取りました。

鬼は娘が死ぬのはやっぱり嫌でしたが、穏やかに微笑む綺麗な死に顔を見たら、それもいいかと思いました。

それから娘の子孫を何代か見送った後で、鬼はふと気づくのです。

あれほど騒がしいと思っていた人間を、それほど気に止めなくなった理由に。

ああ、そうか。私は彼女を愛しているのだ、と

彼女の、その後姿に対する第一印象は、まさにお話の中の鬼そのものだった。

薄暗い部屋の中で一人きり、静けさを好むように、こちらへ背を向けた男の姿は。

だがしかし。

「……あ？ 何だア、この餓鬼。アカ姉^{ネエ}、いつの間に餓鬼なんざ^{くら}掙えたんだよ」

「ちっ。愚弟にまともな反応を求めようと思った私が馬鹿だったか」

肩越しにこちらを振り向いた途端、柄の悪い発言で印象をがらりと変化させた男は、彼を紹介しようとしていた彼女の新しい母からいきなり拳骨を見舞われてしまった。

こうして発展しゆく姉弟喧嘩により、すっかり立場を失った彼女は、所在もなく呆然と成り行きを見守る事しか出来ず。

ただ、幼心に感じたものである。

この人は新しい母の弟ではあるけれど……

一生、「叔父さん」とは、思えないかもしれない、と。

ついでに自分の直感は当てにならないとも、彼女は思った。

むかしむかし（後書き）

書き直したため二度目の投稿ではありますが、と前置きしつつ。

初めまして、かなぶんと申します。

主役二人の出会い話ですが、出番は少なめで名前もなし。

次話からは、時間軸が一気に十年ほど進んだ「ご主人さまと下僕」が始まります。

少しでも楽しんで貰えたら嬉しいです。

心騒がす、噂と百合とあの男 その1

学業から解放された生徒が、思い思いに席を立つ放課後。

六^{りくおう}心高等学校の一年生である上^{かみや}谷悠^{ゆな}風も例外なく、帰り支度に勤しんでいた。

結い上げた黒髪の下には愛嬌が先立つ顔立ち。

白いブラウスとベージュのベスト、灰が基調のチェックのプリーツスカートが象る輪郭は、細くもなく太くもなく、女性らしい健康的な丸みを携えている。

かといって、同じ世代しかいないクラス内にあつては、特に目を惹く容姿でもあるまい。

赤いネクタイがベストから覗く胸元も、クラスの平均値を叩き出すばかりだ。

悠風本人にしてみても、そんな自分は重々承知しているため、何かを警戒するでもなく鞆を机の上へ置くと、肌寒くなってきた秋には必須のコートを取りに席を立たった。

ついでに考えるのは、帰ってからのアレやソレ。

(取り合えず、家に帰って着替えて。ああ、そうだ。確か玉子がもうすぐ切れそうだったから、ちよつと寄り道　は駄目よね。あの人、絶対怒るし)

表面には出さないものの、ふと浮かんだ男の姿に、心の中でげっそり溜息をつく悠風。

以前、牛乳のストックがなかったと寄り道した時は、それを知った彼の気が済むまで、見たくもない映像の鑑賞を強要されたのだ。

お陰で二、三日はイヤな悪夢にうなされたものである。

丁度休みだったから良かった、とは過ぎてからの感想でしかなく、実際にはもう二度とされたくない仕置きだった。

(大体、何だつてあんなのがあの人の手元にあるのよ。預かり物とか押し付けられたとか、理由は知っているけどさ。わざわざ私に見

せなくてもいいじゃない。しかも自分は何観ても平然としてるんだもん。それならいつそ、観なけりゃいいのに」

あくまで表には出さず、悠風は内側で愚痴り続けていた。

彼女の脳裏で飄々とした態度を取る男には、日頃から鬱憤を溜めているのだ。

一度思い出せば、中々晴れてくれない気分を引き摺りつつ、後ろにあるコート掛けまで辿り着いた悠風は、紺のそれに手を伸ばしかけ。

「すみません。上谷悠風さんは、いらっしやいますか？」

少し距離を感じるところから届く、鈴の音のように綺麗な声。

(かみやゆなさん……って、私の事、よね?)

そのあまりの美しさに、自分の名を呼ばれながらもすぐに反応出来なかった悠風は、数拍の間を置いて、ゆっくりと件の音源を振り返っていった。

まず知ったのは、苛立っていたせいで気づかなかった、教室内に漂う水を打ったような静けさ。

声の主が悠風を呼んだからだろう、こちらを見る目はどれも一樣に、間の抜けた点を打っていた。

何故、悠風が呼ばれたのか理解出来ない　そんな風に解する事が出来る、実に見事な点。

はつきり言っただけかなり不愉快な視線だが、声の主を認めたなら悠風自身、同じ思いに囚われてしまった。

教室前方の扉からおおずおおず顔を覗かせる相手が、校内で一、二位を争う有名人・百歳早苗ももとせ さなえ、その人だったのだから。

一年を表す緑地の校章とは違う、橙地の校章は三年生の証。

だというのに、一年生の注目を受けて恥ずかしそうにしている百

歳は、その様子が奇異に映らないほど整った容姿をしていた。

栗色の長い髪は思わず触れたくなる、ふわふわした質感を持ち、羞恥からほんのり桜色に染まった肌は甘さを匂わせる滑らかさ。

弄った形跡が見当たらない眉は柔らかな弧を描き、化粧っ気がないにも関わらず長い睫に縁取られた琥珀の虹彩は、ずっと見つめられていたいと思わせるほど美しい。

ちよこんとある鼻の下、程よくふっくらとした朱唇はあどけなさを残しつつも、艶めく色香を纏わせている。

すらりとした手足は楚楚とした造形を湛えながらも、同じ高校の制服とは思えない女の妖艶さを肢体に宿していた。

少女よりも女に近い、しかし、美女というには清純な印象を抱かせる佳人。

「あの……上谷悠風、さん？」

教室内を満たす沈黙に焦れてか、クラスメイトから注目を受けている悠風へと、再度声を掛けてきた百歳。

「は、はい」

一人だけ百歳へ視線を合わせていたからだろくに、当てられてしまった悠風は狼狽えた返事をする、帰り支度を忘れ、追ってくるクラスメイトの視線の中をふらふら進んでいった。

まるで催眠にでも掛かったような動きで悠風が百歳の前に立てば、佳人の表情に安堵が宿る間もなく、背後の教室内がざわめき始めた。

「百歳先輩……あれって”あの”百歳先輩だよな？」

男子生徒の誰かが呆然と呟けば、別の男子生徒が応じて、「冗談混じりに悔しがる。」

「当然。あんな美人、この高校に二人といるかよ。にしても、俺じやねえのかよお」

「んなもん当たり前だろ？ しっかし女に先越されるとはなー」
しみじみ好き勝手な低音が並べば、遅れて発せられる女子生徒た

ちの甲高い声。

「え？ え？ マジで？」

「あの噂、本当だったんだ……」

「悠風ファイト！」

（ふぁ、ふぁいとって……ちよつと待て！？）

百歳に気取られ、背後のざわめきを聞き流していた悠風は、ここに来て明らかに可笑しい単語が入り混じっている事に気づいた。

（何か可笑しくない？ ファイトって、そりゃ百歳先輩クラスの人と対峙するためには、応援の一つや二つは欲しいトコだけど）

校内とその周辺限定であっても有名な百歳と、烏合の衆の一人ではない自分。

そんな相手に名指しされた悠風は、その緊張感を保ちながらも、聞こえたざわめきを頭の中で整理してみた。

そうして再び「ファイト」の掛け声を再生すれば、別方向からやって来る、目の前の佳人に関するところある噂。

曰く、あんな美人に浮いた話が一つもないのは、彼女が百合だからに他ならない。

（じよ、冗談……でしょ？）

誰に確認するでもなく、そんな疑問符が頭を占拠したなら、当の百歳が悠風の手首を掴んできた。

それはもう、か弱い外見からは想像出来ない力がかっしりと。

「御免なさい。でも、ここでは話にくい。だからどこか二人きりで話せる場所まで移動しましょう？」

「え？」

「どなたか、上谷さんの鞆とコートを」

「は？」

悠風の了承も得ず、百歳の目が背後に投げられれば、さして間を

置かず視界へ入ってくる、見慣れた鞆とコート。

それらを悠風を掴む手とは逆の、自分の鞆とコートを持った右腕に受け取った百歳は、差し出した相手へだろっ、「ありがとう」と柔らかく微笑んでみせた。

うつかりその表情を間近で見てしまった悠風は、麗しい微笑みに一瞬惚けてしまったものの、「では行きましょっ」と促す声を聞くなり、足を強張らせて抵抗を試みる。

するとこの反応にキツと悠風を睨みつけた百歳は、美人の迫力に気圧される彼女へ力を込めて言った。

桜色の頬を更に紅潮させながら。

「大事なお話なんです！ 私の将来に関わる、とても、大切な」
「う、え」

そのまま潤んだ瞳で迫ってくる、自分より少しだけ背の高い先輩に怯む悠風。

しかし、ペースを握られては危険だと察しては、何か反論しようと口を開きかけた

矢先。

背後から轟く、数多の歓声。

何事かと振り返ったなら、男女の別なく、クラスメイト全員が一緒に異常な興奮を示していた。

鼻息も荒く、誰か彼かが言う。

うっそあの噂本気でホントだったのか！？、うわー私リアルでこっついの本当は駄目なんだけど……百歳先輩ならありかも、でもなー相手が上谷ってというのがなー、いやいや中々どうして釣り合いは取れてんじゃね？、だよなー美人同士なら出来すぎて逆にキモいけど悠風だったら悪くないんじゃない？ 等々。

（な、何を仰っていやがるの、貴方がた……？）

具体的には示されていない言葉を察し、悠風の顔が段々と青ざめていく。

シヨックの余り荒げる声まで忘れたなら、この機会を逃すかと言わんばかりに、百歳に掴まれた手首が足早にどこかへ引っ張られ始めた。

クラスメイトの祝福を受け、抵抗する気力をごっそり持っていかれた悠風は、先行する百歳の背中を見つめながら、幻聴に「ドナドナ」の歌を聞いた気がした。

心騒がず、噂と百合とあの男 その2

ひと気の乏しい校舎裏

そこが舞台になる時、果たして人は何を想像するだろうか。

頬を染めた一組の男女ならば、告白の場面を想像するのが妥当だろうし、怯えた顔が一つに他の顔が多数あれば、良からぬ場面と想像して難くない。

額を付き合わせ唸る二人の不良少年がいたなら、近い未来に喧嘩を予感するはずだ。

まさかそこから、両者が唇を付き合わせると考える者は、まずいまい。

そーなったら面白いなー、という個人的な笑いの探求は、脇に置いておくとしても。

(となると、これはどう思えば良いのかなー?)

あらぬ想像により、少しだけ現実逃避を図った悠風は、それでも変わらない百歳の真剣な表情に目を泳がせた。

クラスメイトの非情且つ生温かい声援を受けて自失し、我に返れば校舎裏の壁へ押し付けられている現状。

打破すべく動こうにも、両肩は食い込まんばかりの力で百歳に掴まれており、ちよつとやそつと抵抗したくらいではビクともしないだろう。

かといって相手は同性の女、まさか自由な足で蹴りつける訳にもいかない。

(てか、それ以前に百歳先輩って確か、すつごく強かったよね)

筆を進めれば、どこまでも賛美が書き連ねられそうな百歳だが、意外にも出自は中流家庭らしい。

となれば必然的に自分の身は自分で守るしかなく、その強さたるや今では校内一という噂も、なきにしもあらず。

現に、周辺校の不良たちに「ボス」やら「ヘッド」やら呼ばれているところを目撃した、という噂もちらほら聞こえたりなんだから。

だが、所詮はどれも噂止まりで、実際目にした百歳からは、その手の強さは感じられない。

それでも完全に眉唾物と切り捨てるのは、校舎裏へ辿り着くまで引き摺られていた、悠風の手首の赤い痕が許さなかった。

噂ほどではないにせよ、とりあえず悠風程度なら軽く伸せる腕が、百歳にはあるはずだ。

脱出を試みて襲い掛かっても、逆に組み敷かれて得体の知れない世界へレッツらゴー、も有り得る話だろう。

(いやいやいや！ ないから、有り得ませんから、そんな話！ そもそも、ソツチにしたって噂でしかないでしょ！？ だ、大体、今日まで接点のないのに、何で選ばれてんの私！？)

混乱の極みに達し、段々と逃げの想像までままならなくなってきた悠風は、こうなったら本人に直接聞くのが一番だと、ここに来て初めて、まともに百歳と目を合わせた。

するとほぼ同じタイミングで、百歳が切なげに顔を歪めて言った。

「悠風さん…… お願いがあるの」

「は、はい。なんでしょーか？」

苗字から変じた名前呼びに、思わず出てしまう引っくり返った高い音。

(な、なんでいきなり名前呼び？ 幾ら先輩でも、普通は苗字でしょ！？ 友達に同じ苗字がいるとか、すごいフレンドリーな先輩だっていうなら兎も角！ お、お願いですから、どうか噂は噂のまま置いて！)

背中に冷や汗を掻きつつ、カラカラに乾いた口を抱えながら、心の中で祈るように叫ぶ。

だが、悠風がどんなに叫ぼうとも目の前の現実には届かず、百歳は瞳を潤ませると、懇願する眼差しを向けてきた。

「私、私ね？　ずっと悩んでいたの。でも、あなたの事を聞いて…
…もうあなたしかいないと思って…だから、あなたに会いたくて
勇気を出して…来たの」

（ひ、ひいっ！？　何その思わせぶりな台詞！　違うよね！？
頬染めてても違いますよね！！？）

狂おしい思いを秘めた顔つきで見つめられ、気分は蛇に睨まれた
蛙そのもの。

もつれる舌は喉を鳴らす事しか出来ず、強張った両手は百歳を振
り払う事も出来ず。

唇を真一文字に結び、悠風が心持仰け反ったなら、これを詰める
ようにずいといと近づいてきた百歳が、肩を離して無防備だった両手
を取ってきた。

途端、悠風の鼻腔をくすぐる甘い香りは、眼前の守ってあげたく
なるような人物から漂う香水か、はたまた体臭か。

（先輩の、イイ匂い…って違うから！　私は全く、ソツチの感情
はないから！！　私が好きなのは　って、そっちもちっがぁーう
っ！！）

ぱつと浮かんだ姿に力一杯否定を入れる。

知らず知らず、頬が熱くなり、耳まで赤くなってきても、悠風は
それを肯定する訳にはいかなかった。

望めばすぐに叶えてくれる、だからこそ望みたくない相手。

帰りが少し遅くなったくらいで、イヤな仕置きを決行するからで
はない。

元より嫌いではないが、好きと軽く言うことも出来ない程、あの
男は問題過多なのだ。

悠風にとっても、あの男自身にとっても。

(あの人はナシ！ それ以前の問題！ でもっ！！)
助けては欲しい そんな切羽詰った悠凧の願いも空しく、至近に迫ってもなお、迷いをみせていた百歳が口を開いた。

恋する乙女のような、麗しい表情で。

「悠凧さん、お願いします。私、あなたがス」

「ストップ！ 駄目、無理、御免なさい！」

百歳の続く言葉を故意に遮った悠凧は、目を瞑ってはつきりと断りを入れた。

反応はビクツと強張った両手から伝わってくる。

ともすれば襲ってくる罪悪感に、それでも受け入れられないと言い聞かせた。

早く離れて欲しいと思いつつも、そおーっと目を開ければ、軽く目を見開いた百歳が、呆然とした面持ちで言った。

「え……駄目なの？ 助けては、貰えないの？ ストーカー、あなたなら何とかしてくれるって、噂で聞いていたのに」

「噂って……え？ すとおかあ？ ここに連れて来られたのは、そのため？」

百歳の言葉に悠凧が同じく呆然とすれば、一步離れて瞳を伏せた佳人は、怖がる素振りで自分の左腕を右手で摩る。

「ええ、そう。ストーカー。でも、ただのストーカーではなくて、警察どころか、親にも友達にも、どう説明したら良いのか判らないような……でも、駄目なら仕方ないわね」

「あ、いえ、すみません。そのストーカーのお話、是非お聞かせ下さい」

どうつやら自分とはんでもない勘違いをしていたらしいと、今まさに気づいた悠凧。

続け様、ただのストーカーではない、どう説明したら良いのか判らない、という言葉に耳にするなり、あれだけ離れて欲しいと思っ

ていた百歳の腕を自分で掴む。

真偽の未だ判らない百歳の噂よりも、彼女が語った、自分に関連する噂を信じて。

出所不明ではあるものの、六応じくおうの名に連なる施設周辺には、ある一つの噂が横行している。

誰にも相談できないような現象を解決してくれる、そんな便利屋直結の御用聞きがいる　と。

勿論、その程度の噂ならば、御用聞き＝悠風という図式にはならないはずのだが、どういう訳か件の便利屋を必要とする者の耳には、今回の百歳のように、悠風こそがそうだという声が届くらしい。眉唾物の話ではあるが、実際そうなのだから仕方ない。

不思議な現象以上に不思議なところから訪れる話だが、悠風は惑う事なく、百歳をある人物の元へと連れて行く。

百歳の話す不可思議な現象が、悠風のよく知る現象だと判断したがために。

迷鏡堂の主人

悠風の通学路の延長線上　　正確には上谷家のすぐ隣に位置する店・迷鏡堂。めいきやうどう

長年、雨風に晒された手狭な一軒家は全体的にくすんだ色をしており、通りに面したガラス張りの出入り口を覗いても、テナント募集中と勘違いしてしまいそうなガランとした店内が見えるだけ。

住宅の隙間を縫って夕陽が差し込んだところで、ひと気のない薄暗さに変わりはなく、夜になったとしても中から灯りを認める事はできない。

時たま客が入る事を除けば、十中八九、廃屋だろうこの店を店たらしめているのは、引き戸に掛けられた「open」という、外観に似つかわしくない洒落た書体の営業サインのみ。

夜になれば当たり前のように「close」と示される、しかし何をしているのか全く判らない迷鏡堂には、冷やかし目的の者も尻込みする雰囲気があった。

かといって、古くからこの場所に佇む店、恐れるご近所さんは転居者のごく僅か。

前々から住んでいる者にとっては、事件性もない以上、単なる他人の持ち物でしかない。

そんな迷鏡堂の扉を開く機会があったなら、まず驚くのはその光量だろう。

扉を開けた瞬間に放たれる白は来客の眼を焼き、束の間の闇を強要してくる。

徐々に眼が慣れていけば眼前に広がる、簡素な土間と踏み板、引き戸のない壁に仕切られた畳の居間、左上に伸びる木造の階段といった些か古めかしい内装。

悪く言えば時代遅れ、良く言えば味わいのある店内は、意外にもしつかりした造りをしており、これに惹かれて眩んだ足が一步踏み出したなら、アスファルトに慣らされていた靴底を乾いた砂利の感触が迎える。

ここで更にバランスを崩した客が、ちらりと後方を掠めたなら、たたらを踏んで眼を丸くするはずだ。

何せ、ガラス張りだったはずの出入り口は、周りの砂色同様、土壁の質感を過ぎらせるただの壁に様変わりしているのだから。

しかも閉めた覚えのない透明な引き戸の窓の先は異質な闇に遮られており、鏡のように室内の光を反射させるだけで、決して外の景色を映さない。

その瞬間、客が受ける感覚は、別世界に紛れ込んでしまった、という後悔だろうか。

事実、この店を出る時は、入店時とは逆に視界が黒く塗りつぶされ、徐々に取り戻される日常の光をはっきり認識したなら、あたかも白昼夢を見ていたかのような錯覚を引き起こす。

人によつては、迷鏡堂の中での事全てが、夢として処理されてしまいかもしれない。

とはいえ、この店を訪れる客にはそもそも、ここを異常だと判じられる精神的余裕が全くなかった。

常識の範疇にない店でも、常識内で落ち着いてしまっくらい、追い詰められているのが常なのだ。

それは、不可思議な現象を悠風に相談してきた百歳にしても、例外ではなく。

迷鏡堂の入店時の眩しさを、慣れた調子でやり過ごした悠風は、無駄に広い土間をズンズン進んでいく。

「あ、あの、悠風さん？」

遠慮のない足取りに百歳が困惑したように声を掛ければ、肩越しに一瞥して心の中だけで小さく唸った。

（百歳先輩、やっぱりそうみたいね。普通だったらしばらく目も開けられないし、身動きだつて怖くて出来ないのに）

百歳の話聞き、ここまで案内したものの、彼女の被った不可思議な出来事が、本当に悠風のよく知る現象かはまだ判らなかった。

「おい、閑人さん！」

それでもこの店に入ってから反応は、その現象に悩まされていた過去の依頼人と酷似しているため、悠風は踏み板前で立ち止まると、百歳へは何も言わずに迷鏡堂の主を呼んだ。

一刻も早く、百歳の悩みを解消出来たらと思いつながら。

しかし、待てど暮らせど返事はやって来ない。

聞こえなかったのかと、もう一度、今度は声を張り上げて呼ぶ。

「おい、閑人さん！」

だがやはり、返事はおろか物音さえ聞こえては来なかった。

おかしいと悠風が眉根を寄せて首を捻りかければ、百歳が小さく袖を引いてきた。

「ねえ、悠風さん？もしかして、いらっしやらないのでは？ど

こかへお出かけしているとか」

「へ？ ああいえ、いないって事は在り得ないんですけど」

「？ 在り得ない？」

「あ……いや、その、出不精なんですよ、ここの人」

(本当はちょっと違いますけど……なんて言えないし)
心の中で一言加えつつ、表面上は「しょうがないですよー」という困り顔の笑みを貼り付けておく。

結わえた頭を押さえたなら、なるほどと頷いた百歳にチクリと胸が痛んだ。

だからと本当の事は言えない悠風、それもこれも早く返事をしない迷鏡堂の主人が悪いのだと結論付けては、両頬に手を添えて再び名を呼んだ。

「閑人さん！ お客さんですよ！！」

しかし結果に変わりはなく。

痺れを切らした悠風は戸惑う百歳へ「待っていて下さい」と言い残し、勝手知ったる他人の家へ上がっていった。

階段を昇れば、左に二つ、奥に一つの扉を構えた短い廊下が視界に入ってくる。

その内、奥の扉へ迷わず突き進んだ悠風は、無視されようが親しき仲にも礼儀あり、とノックを数回試みた。

が、やはり、そこから返事はやって来ない。

「……いる、よね？」

応えはなくとも、悠風の経験上、目当ての人物は必ずこの部屋にいるはずだ。

恐る恐る扉へ耳を付ければ、悠風の経験値を裏付けるように、微かな物音が聞こえて来た。

ただしそれは、悠風の知らない、すすり泣く少女のような声であり

(え？ な、何、この声？)

「か、閑じ　っきやうむ!?!?」

怯みながらももう一度、そこにいるはずの男の名を呼ぼうとした悠風は、その前に開いた扉に驚く間もなく、部屋の中へと強引に連れ込まれてしまう。

拍子が上がった声が引きずり込まれた先でくぐもる呻きとなれば、離れようとする顔を嫌うように、厳つい男の手が悠風の背に添えられた。

この動きで相手が誰なのかを理解した悠風は、抱き締める腕に抵抗する無意味さも同時に悟ると、胸板へ埋められていた顔だけを上げる。

果たしてそんな悠風を迎えた相手は、彼女の予想通り、迷鏡堂の主人である影浦閑人。かげうらかんじん

柄の悪い人相ににやついた表情を浮かべた閑人は、何の言葉もなく、ひょいっと彼女の身体を抱き上げた。

短いスカートがいけなかったのか、下着越しに彼女の尻を掴みつつ。

「やつ、閑人さん、ちよつと!？」

掴まれているだけでも肌がざわめくというのに、暴れば自然に撫で揉まれてしまうであろう臀部。

これ以上の羞恥という人質に動けなくなった悠風は、抱き上げられたことで、上から下へ移動した閑人の顔を睨みつける。

しかし、扉越しに聞こえたのと同じ、甲高い女の声が耳に届いてはそちらを見やり、ピシッと固まってしまった。

悠風が直視したのは、廊下からの明かりを取り入れたところで薄暗い部屋の奥、もう一つの光源であるテレビの映像。

図らずもこの時、画面向こうから、ギリギリ高校生で通じるか否かの女が、乱れた制服を隠すよう腕を回し、涙を溜めた瞳で訴えてきた。

”叔父様……お願い、止めてっ”

瞬間、悠凧の頭のどこかで、ブチツという危険な音が響く。

「こ、こんの変態エロオヤジ！ 人が学業から解放されて帰って来たっていつのに、早い時間から何見てんのよ！！？」

掴まれた人質を忘れて悠凧が暴れても、器用に彼女を掲げ続ける閑人は、避けにくい上からの攻撃を見事に避けつつ、悪びれもせずに告げた。

「何って、見たまんま叔父と姪モノ。ダチ二人一押しの本立でだぜ？ 一本目は両親と死に別れた姪と一つ屋根の下で暮らす叔父の禁断愛重視。二本目のコレは調教くせえな。可愛い姪に初めての彼氏が出来たって言われて、プツンしちゃった叔父が、色々教えてやるとか偉そうに言いつつ、姪のハジメテを全部頂くつつ」

「知るか！ 内容とかそんなの、心底どうでもいいわ！！ いいから放せ、放して！ でもってそれ消して、お客さんが来ているんだからあつ！」

最後は懇願に近い声で叫ぶ悠凧。

百歳を待たせているというもあるが、彼女にとってこの部屋でこの手の映像の類は鬼門であった。

どう足掻いても思い出してしまうのだ。

いつかの日、仕置きと称して目の前の男から、延々観る事を強要された同類の映像、その内容を。

正確にはその内容をなぞった色んなシチュエーションで、閑人に良い様にされてしまう悪夢を。

(とう……何で観たくもない、年齢制限にだって引つ掛かるはずのモノを観なくちゃいけないのよ！ しかも今度は叔父と姪って！ 何の嫌がらせよ……)

そうそう内容をなぞる夢を見るとは思えないが、一度体験してし

まった身、可能性は拭えない。

嘆く心とは裏腹に、火照り始める身体から悠風の瞳が潤めば、元凶の閑人は以前と同様、盛り上がるテレビには目もくれず、困ったような顔をした。

「あーあー、悪イ悪イ。この程度で泣くなよ、悠風。よしよし、お客さんが来てるんだったな。行ってやるから、もう泣くな」

抱えられた身体の位置が低くなれば、幼子をあやすようにぼんぼんと叩かれていく背中。

そのくせ閑人の逆の手は、相変わらず尻を掴んだままだった。

つまるところ、目の前の男は気づいていないのだ。

悠風がこの体勢に、どれだけ羞恥を抱いているかを。

(くっ……こんな映像観ているくせに、姪の扱いは小さい頃と同じってどうなの!?)

別段、特別な反応を期待した憶えはないが、戸籍上、正真正銘の叔父である閑人の所業に、悠風は小さく唇を噛んだ。

悠風と閑人、二人の関係

百歳が誰にも相談出来なかったという、ストーカーの存在。その概要を聞いていた悠風は、不安げな百歳へ確信を持って言った。

「そついうのに詳しい人がいます。その人に会いに行きませんか？」と。

悠風が語った”その人”とは、母方の叔父・影浦閑人かげうら かんじんの事。

しかし彼女は百歳に多くを語らず、閑人の店兼自宅である迷鏡堂まで連れて来た。

それが後々、どんな誤解を招くかも知らずに。

俯く悠風の顔を伺いながら、器用にテレビを消した閑人は、彼女を腕に抱えたまま廊下へ出ようとしていた。

(ちよっ!?)

彼にしてみれば、子どもをあやしている感覚なのかもしれないが、一階に百歳という来客がいる以上、大人しく抱えられている訳に行かない悠風は、顔を上げて閑人の胸倉を掴んで制止を叫ぶ。

「す、ストップ、閑人さん！ 行くなら降ろしてからにして！」

「アア？ 別にいいじゃねえか。こつちの方が楽だろ？」

言いつつ止まった足にはほつとした悠風、反面、降ろしてくれなさそうな閑人の気配に焦った。

「やっ、楽とかそついう話じゃないし！ ほ、ほら、必要以上に歩

かないと太つちゃうし、重いでしょ？」

「別に重くないぜ？ それに細いばっかの女よか、肉付きがイイ女の方が好ましい」

「いや、閑人さんの好みとかどうでもいいから。じゃなくて、あ、あのね？」

「うん？」

胸倉から手を離し、廊下に近づいた事で見えるようになった、渋色の着流しの皺を伸ばし伸ばし、上目遣いで閑人を見やった悠風。するとその眼鏡奥にある青鈍の瞳が、柔らかな眼差しを注いでいる事に気づく。

滅多に見ないその光に、知らず知らず悠風の視線が下を向いたなら、これを逃さない動きで身体がまた、高く掲げられた。

自然、閑人を見下ろす形になった悠風は、変わらぬ眼差しの追求に、かーっと赤くなる頬を感じながら、彼の肩に手を置くとうろたえつつ訴えた。

全く気づいていない閑人の様子を受け、自分だけが意識しているのが馬鹿らしいと、敢て伏せていた事柄を。

今も閑人に掴まれている、その場所を。

「あのね、あの……さ、さっきからお尻、掴まれているんですけど」

「……ああ、コレか」

何だそんな事かと言わんばかりに、つまらなさそうな顔をした閑人。

「ひゃっ!？」

しかして事はそれで終わらず、今まで静かだった手が指摘した場所を揉み始めた。

「や、ちよ、閑人さんっ!？」

支える手がぐらつき始めた事で、不安定になった上半身が閑人の飴色の頭に胸を擦り寄せれば、顔を上向かせた彼は至極真面目な顔で言った。

「悠風、ネクタイとベストが邪魔だ」

「し、知るか変態！　いあっ」

勝手な言い草に悪態をついたのも束の間、巧みな指に腰が力を失い、乗じて抗う勢いが殺されていく。

「か、閑人さぁん……」

自分でも非常に情けないと思う声で名を呼んだなら、膝裏から腿にかけて、閑人のもう一方の腕が回され、低くなる身体の位置。

かといって悪戯な手は揉む事を止めただけで、そこを我が物顔で撫で回し続けている。

「閑人っ、さん？」

一度挫けた抗う心を取り戻せない悠風は、激しい動きから転じた静かな動きに何故か安堵すると、むず痒い刺激にもじもじしながら閑人を見つめた。

そつと胸元に両手を添えれば、にやりと意地悪く閑人が笑う。

「てつきりコレは、お前の帰りを待っていた俺への褒美かと思ったんだがな。だから黙っているモンだとばかり」

「そ、そんな訳ないでしょっ。ってというか、わざと？　わざと掴んでたの？」

「まさか。これでも抱え上げた時にヤベエとは思ってたんだぜ？　けどお前、何も言わねエし、ならイイかと」

「良くない！　放して！」

自分だけが意識している訳ではなかったと知り、入り混じって襲ってくる羞恥に、悠風が再び閑人の胸倉を掴む。

しかしその間も手を休まず動かし続ける閑人は、悪びれもせず首を振った。

「まあ待て。この際だからもう少し、薄布越しの張りのあるスベスベ感を」

「何言ってるの！？　も、百歳先輩が下で待っているっていうのに！」

「あ、私の事ならお構いなく」
「!?!?」

突如、背にしていた廊下から届く、鈴の声音。

ギギギ……と音がしそうなほど鈍い動きで悠風が振り向けば、抱えられているせいで少しばかり低い位置にある百歳の頬が、僅かに紅潮している姿があった。

さつと顔を青褪めさせる悠風とは対照的に、口元に軽く手を当てて恥らう佳人は、それとなく視線を逸らすとちらちらこちらを見ながら言う。

「その、勝手に上がって御免なさい。一人だと少し心細くて、つい……あの、また一階で待たせて貰いますね。えと、お邪魔してすみませんでした」

「も、百歳先輩……？ な、何か凄い勘違いを」
是非訂正させて欲しいと伸ばしかけた手。

しかし、百歳の登場により止まりながらも、未だ占拠する手の感触に身じろげば、時既に色々遅かったと悠風は思い知った。

いつから百歳がいたのかは知らないが、言葉の割に大した抵抗もせず、閑人の所業を受けていた事実は消せないだろう。

しかも制服の上からでもダメなところを、スカートの中で、と来た日には。

（もっとちゃんと嫌がれば良かった……）

今更悔いても仕方のない部分に涙を呑む悠風。

と、中途半端に宙を漂っていた手が取られた。

はつとして顔を上げれば、真剣な表情で見つめてくる百歳がそこにはあり。

「駄目よ、悠風さん。恥ずかしいからって、彼氏さんとの営みを否定したら罰が当たってしまうわ」

「……はい？」

(カレシサンって、ナンデスカ？ イトナミってオイシイの？ バチって……ええ？)

別次元から悪質な電波を拾ってきたとしか思えない百歳の言に、悠風の思考が完全に止まれば、代わりとばかりに閑人が断りを入れてくる。

「悪イが嬢ちゃん、コイツと俺は恋人じゃねえ。ただのご主人さまと下僕つつう関係だ」

「あらまあ」

「……おい？」

(どさくさに紛れて何を　　っていうか、百歳先輩？ 何故そこで目を輝かせて顔を赤らめた拳句、恥ずかしそうに両頬へ手を添えるんですか？)

明らかに可笑しい百歳の反応を受け、またしても悠風が出遅れたなら、そんな彼女に佳人は言った。

「そう、そうよね。それなら納得だわ。最初見た時、悠風さん嫌がっていたし、恋人同士にしてもどうかしらって思っていたけれど」

(それって……明らかに早い段階からココにいましたよね！？)

何で止めてくれなかったんですか！、という思いを込めて凝視すれば、また何を勘違いしてか、きゅと恥らうように身を擦った百歳が続けた。

「ご主人さまと下僕……そんな関係がまさか、こんな近くにあるなんて。うん、大丈夫よ、悠風さん、安心して。この事は誰にも言わないから」

ぐっと拳を握り締めて力強く頷く百歳に、心強さより「この人、頭大丈夫？」と案じてしまう悠風。

とはいえ、それでも百歳の頭脳は学内トップクラスの成績を誇るため、平均並な成績である悠風は心配をぐっと呑み込むと、遅ればせながらの訂正を入れる。

「いや、百歳先輩」

「別に公言しても構わねエが」

だがしかし、呼名を引き継ぐていで閑人が先に言葉を発せば、全て台無しとなるのは必定。

悠風が口をパクパクさせても、閑人と百歳の二人は察する事なく話を進め、

「え？ 良いんですか？」

「ああ。俺は、な。ただ、悠風がイイ顔してくれねエから」

「そうですね。公言したら悠風さん、変な方々に目を付けられてしまいそうですし」

「まあな。それに公言したところで、俺らの関係が変わる訳でもなし。悠風がもつとそれらしく振舞うってんならまだしもなあ」

「確かにあまり意味はないかもしれませぬね」

「だろ？」

そして、どちらともなく息を付く事で、話を終わらせていった。

残された悠風は、息の合った二人に置いてかれた気分を味わい、少しだけ眉根を寄せた。

(初対面なのに、この息の合いようはどうなの？ てか百歳先輩、結局閑人さんの説明に納得しちゃってるし)

今更違うと言っても照れ隠しと解釈されそうな雰囲気、益々悠風の機嫌が斜めに下がって行けば、見計らったように降ろされる身体。

あれほど望んだ解放にも関わらず、閑人の羽織の裾を握った悠風は、これを受けて彼の腕が腰に回されても、顔を俯かせただけで、引き寄せる動きには逆らわず従う。

だからという訳ではないだろうが、見届けた百歳がぼつり零してきた。

「それにしても……犯罪級の主従関係ですね」

(うっ)

青年と呼べる若々しさのない、男の性のみを語る見た目年齢不詳の閑人の実年齢は、四十代後半。

対する悠風は十六歳の現役女子高生。

ここへ来て初めて投げられた百歳のまともな感想に、悠風は自ら進んで閑人の陰に隠れてしまった。

依頼人・百歳早苗

情報として必要だから近況を話せという閑人に頷いた百歳。

どこから話そうか迷う素振りで見線を行々させた彼女は、意を決すると静かに語り始めた。

「始まりは、たぶん、私が失恋した時からだと思います」

「え、失恋！？ 百歳先輩が！？」

（それってやっぱり女の人！？ それとも男の人！？）

場所を一階に移し、気分一新、来客用の茶を淹れてきた悠風は、丁度耳にした百歳の告白へ、不躰ながらもそんな反応をしてしまった。

百歳の百合疑惑に振り回された結果と言える。

しかして百歳は言わずもがな、閑人にまで驚いた目を向けられれば慌てて口を閉ざし、土間が臨める居間のちゃぶ台へ、茶を注いだ湯飲みを静かに置いていく。

そうして何事もなかったかのように閑人の後ろに控えては、私は関係ないですと言わんばかりの姿勢で、膝小僧に視線を落とした。

（なんとか一番不味い部分は飲み込めたけど……それにしただって、何であんな声上げたのよ、私。うああ、失恋相手の性別がどっちでも、すつごく居心地悪いんですけど）

迂闊過ぎる口に悠風の気持ちがあんどん下がっていけば、これを見越したていで百歳から苦笑が為された。

「気にしないで、悠風さん。私が失恋したって言うと、皆大体同じ

反応だったから」

「み、皆って」

「友達とか……大杉先生とか？」

「大杉先生って、確か」

「そう。」あの”大杉先生よ”

「あ。す、すみません」

百歳の言葉で「大杉先生」を浮かべかけた悠風は、くすくす笑う佳人のニュアンスに、今度こそ謝罪を伸べて頭を下げた。

「大杉先生」とは、新任の若い男の教師であり、ある噂で一時騒がれた人物でもあった。

その噂とは、目の前の佳人とこの教師は出来ている、という何とも下衆な代物。

早い段階での当人たちの否定により、そこまで根付く事のなかった噂だが、一瞬でも浮かんでしまった悠風はそこからある事に気づいて、ぱっと顔を上げた。

「あ、もしかしてあの噂の出所ってつまり」

「そう。そうなの。大杉先生には悪い事してしまったわ。私がいままで失恋を引き摺って落ち込んでいたせいで。ただ心配して下さっただけなのに、変な噂を立てられてしまって。人気のある先生って大変よね」

(いや、確かに大杉先生は人気ありますけど……)

今度こそ悠風の脳裏にはつきりと浮かぶ、「大杉先生」の姿。

サラサラした黒髪に吊り気味の薄茶の瞳、細い楕円の眼鏡の下には酷薄そうな唇。

整った顔立ちに均整の取れた長身も合わされば、冷淡な印象を与えるところだが、「大杉先生」の人気の秘密はそこにはない。

そういう容姿にも関わらず、陽だまりのように穏やかな人当たりが生徒、いや、教員・保護者含めた女たちの母性本能を擽るという。

ちなみに悠風はこの女たちの中に含まれない少数派であるため、客観的に冷静に、その人気度合いを計る事が出来た。

（女性限定の人気だもんね、あの先生。同性だと態度が豹変するって訳じゃないけど、頼りない感じが男子には不人気だし。その点、百歳先輩は老若男女問わずだもん。本人自覚ないみたいだけど）

他人事のように「大杉先生」の人気を語る百歳へ、「どちらかというところあの噂は、相手が百歳先輩ってところが大きいような」と言いたくなる口をぐつと堪えた悠風は、ちらりと閑人の後頭部を見やっただ。

いつもならばここで「さっさと本題に入れ」ぐらい言うのだが、今回に限ってはやけに大人しい。

ちやぶ台に頬杖をついたまま、百歳の方だけを見続けている。

（もしかして閑人さん……百歳先輩に見惚れている？）

百歳の老若男女問わない人気を思えば、会ったばかりでも可笑しな話ではないが、何やら腑に落ちない気分悠風の眉が軽く寄った。もやもやする晴れない胸の前で無意識に軽く拳を握った悠風は、気を取り直すと百歳へ頭を下げた。

「えっと、すみません。話の腰を折っちゃって」

「ううん。少し緊張が解れたわ。ありがとう、悠風さん」

「そんな……」

につこり微笑まれたなら、もやもやするばかりだった胸が大きく跳ねた。

自然と熱くなる頬に恥ずかしくなり、悠風の視線が徐々に下がっていけば、「でも」と百歳の声が続く。

やはり何か不備が？ と悠風が急いで顔を上げたなら、迎えた佳人の顔は困ったように笑っていた。

「このまま話しても良いのかしら？ その……先程から眠っていらっしやるようなだけけれど」

「……へ？」

指摘を受けて膝立ちのまま閑人に近づいた悠風は、横から彼の顔を覗き込んで絶句する。

百歳に見惚れていると疑ったばかりの閑人は、まるで考え事でもしている様に目を閉じながら、不安定な頬杖姿勢で船も漕がずに確かに眠っていた。

「……すみません、百歳先輩。今、起こしますから」

ぐっと拳を握り締めた悠風が、剣呑な目つきで閑人を睨む。

ここまで百歳を連れて来た手前、この男には何が何でも全部聞かせなければならぬ。そんな使命感に燃える悠風をどう思ったのか、百歳は居住まいを正すと笑って首を振った。

「ううん、いいの。……というか、ここまで連れて来て貰ったのに図々しいのだけれど、悠風さんでは駄目なのかしら？」

「え、私？」

「そう。その、こういう話でしょ？ 男の人より、悠風さんの方が話しやすいかなって」

「ええまあ、閑人さんと顔を合わせて貰ったなら、詳細は後で伝えられるんで、私が聞いても問題ありませんけど……いいんですか？ 私なんかで」

「ええ。悠風さんが、いいの」

「そ、そうですね」

同性だというのに甘く微笑まれ、思わず目を逸らしてしまった。

年上であり、自分より強いにも関わらず、守ってあげたいと衝動的に百歳へ感じた自分が痒い。

またしても赤くなっていく頬の熱に戸惑いながら頷いた悠風は、眠る閑人を冷ややかに一瞥して後、彼より前に出て百歳の話へ意識を集中させた。

概要は聞いていたものの、改めて聞く百歳の話は、一様に怪談めいた代物だった。

朝起きれば「お早う」、家から出るときには「行ってらっしゃい」、帰って来たなら「お帰りなさい」、夜眠るときには「お休み」、耳元でひっそり囁く、男の声。

しかし辺りを見渡してみても誰もおらず、百歳は当初、これを幻聴として片付けた。

精神的な疲労からくるものだと思っていたのだ。

彼女はその数日前に、失恋したばかりだったから。

ずっと想い続けて、決心して、告白して、そして破れた恋。

泣いて泣いて泣いて、泣き続けて、それを偶然見てしまった教師が心配し、その様子を見た誰かが百歳と教師とのあらぬ噂を立てる程に、追いやられた失恋。

だからこそ、一区切りついたと思えた矢先のソレは、百歳の心を柔らかく切り刻んでいった。

幻聴のその声は、百歳が失恋した相手と同じ声をしていたゆえに。

だが、これを嫌うように別のアプローチが為されていく。

ある日の着信音に、携帯電話のディスプレイを見やれば友人の名前。

気安く出た百歳だが、聞こえてきたのは友人の声ではなく、雑音混じりの小さな声だった。

最初は友人がふざけているのかと思い、文句を言おうとしたものの、雑音に慣れてきた耳に内容が届けば、それは延々と百歳のその

日一日の行動を語っていた。

勿論、確かめても友人は連絡を入れておらず、消えていた着信履歴に故障を疑っても機種に問題はない。

気味の悪さにしばらく携帯の電源を落とすことを考えた百歳は、その旨を伝えるメールを打とうとしたのだが、未送信のメールが一通ある事に気づいた。

何の手違いかと内容を確認した百歳は、次の瞬間、心臓を掴まれる思いを味わったという。

出てきたのは添付された一枚の写真。

それも、百歳の携帯のデータにはない、明らかに盗撮と判る代物だった。

ファミレスの観葉植物を遮蔽物に、誰かへ向けて微笑む百歳を写した画像。

薄ら寒いそれに怯え、百歳は我を忘れて携帯電話を窓から投げ捨てた。

だが程なく、携帯電話は戻ってくる。

どこであろうと、彼女の部屋の机の上に、何者かの侵入の痕跡も残さず。

送信メールの一覧に”捨ててるな”という題名のメールを多量に残した状態で。

これがもし、受信メールの一覧にあったのなら、百歳も親や友人に相談出来ただろう。

警察に調べて貰うことも出来たかもしれない。

しかし、これらの被害はどれだけ真摯に訴えようとも、彼女に虚言癖の疑いを掛けるだけで、第三者には上手く伝わらないモノばかり。

当の百歳にしても、怪奇現象を疑うより、自分の頭を疑う方が良いと思う程だった。

だが、後にストーカーと位置付けた相手は、そんな百歳の、理解という名の逃げを許さない。

友人の声音を使って電話をし、わざわざ百歳の母を経由して。自分の頭を疑う百歳を見透かした口ぶりで「君は正常だ」と。

次の日、友人と母を引き合わせた百歳は、電話を巡ったの成り立たない二人の会話を聞いて、ようやく一連の現象が自分の問題ではない事に気づいたのである。

そして方法は兎も角、行動はストーカー以外の何者でもない、とも。

かといって、誰にも相談出来ない事態には変わりなく、百歳は悠風に繋がる噂を聞くまで、一人で悩み続ける事になる。

普段と違う彼女に心配する声があっても「考え事をしていただけ」と、笑って誤魔化しながら。

その存在、その価値 その1

暗くなつた空に、「(閑人さんと)送りましたよか?」と申し出たなら、百歳は笑つて「近くだから大丈夫」と答えた。

次いで悠風の手を取つては、「話を聞いてくれてありがとう」とも。

今まで誰にも話せなかつたせいだろう、話し終えて幾らかすつきりした佳人の微笑に、感極まつた悠風が「百歳先輩……」と呼べば、苦笑に転じた彼女は「早苗って呼んで?」と言つてきた。

何度この人は同性と言いつても火照つてしまふ頬にうるたえつつ、悠風が「早苗先輩」と言えば首を振つた彼女は「早苗」とだけ告げてくる。

ますます紅潮していく肌を感じながらも、「さ、早苗さん」と上擦つた声で呼んだなら、「はい」と百歳 早苗が綺麗に笑つた。

そうしてその背が見えなくなるまで見送つた悠風は、熱を冷やす秋風にぶるり身体を震わせると、コート下が制服のままだった事に気づいて、隣家である自宅に向かい、かけ。

「知らなかつたなあ? 悠風が女好きだったとは」
「か、閑人さん」

両脇から伸びて来た腕に包まれ、見上げればにやにや笑う閑人の顔。

早苗が話し終えるのを見計らつたように起きた男は、彼と一緒に出てきた事を忘れていた悠風を責めるでいで、抱く腕を縮めていく。ついでに悠風の肩へ顎を置いては、彼女の耳を擦る近さで尋ねてきた。

「俺は別に構わないぜ? あの嬢ちゃん、美人だしよ? プロポー

シヨンにしても中々どうして、美味そうだ」

これ見よがしにぺろりと鳴る、意地汚い舌の音。

瞬間的にカツとなった悠風が横を向けば、回されていた閑人の手が、死角でスカート真下の腿をさらりと撫でた。

「っ！」

身を擦って離れようとしても、余裕の表情を崩さない閑人の力には及ばず、悠風はまたしてもひよいと軽々抱え上げられてしまう。

しかし手の位置は先程とは違い、横抱きの背中と足を固定するばかり。

それでも恥ずかしい格好には違いなく、暴れようとすれば、ぼそりと閑人が言った。

「悠風、あんまり足広げんな。中が見えちまうぞ」

「うっ」

慌ててスカートを押えたなら、くつくつ笑う声が密着する身体に響く。

腹が立つても、いつ人が通るか判らない外では荒げられる声もなく、悠風は忌々しげに閑人を睨みつけた。

「閑人さん、降ろして下さいっ！」

「上谷宅に着いたらな」

「何で！」

「鳥肌立ってるじゃねえか。寒いんだろ？ 風除けぐらいにはなんだから、黙って抱かれてろ」

「……………」

抱き上げられた理由を聞き、悠風の口が閉ざされる。

事が悠風のためと言った閑人は、今までの経験上、てこでも彼女の言う事を聞いてくれないのだ。

だからこそ自宅前、「鍵」とだけ告げる閑人にも逆らわず、悠風は自宅の鍵を渡した。

悠凧が早苗から聞いた詳細を閑人に話したのは、二階にある自室で着替えている最中。

閑人がいるのは鍵もない扉越したが、決して開けてこないと知っているため、悠凧は下着姿になりながらも普通に尋ねていった。

「ねえ、閑人さん。これってやっぱり幻魔絡みだよな？」

悠凧の言う「これ」とは、早苗のストーリーカーの話。

対し、閑人の返事は簡潔だった。

「ああ。微妙だが、嬢ちゃんから気配を感じた」

「そっか……」

扉越しの少し籠もった声を聞き、悠凧の表情が僅かに陰りを帯びていく。

早苗が体験した不可思議な現象、その根底にある者を思い浮かべて。

ファンタム 幻魔

それは人間の心の中に生まれた邪な思いが、特定の条件下で単独の意思を得た存在である。

といっても、最初から現実に姿が在る訳ではない。

普段は宿主キャラクタと呼ばれる、産みの親とも言つべき人間の精神に身を潜めており、その人間の欲が叶うよう、陰ながら異質な力を用いて援助している。

早苗の身に起こった出来事も、閑人の確信が得られた以上、幻魔の仕業と見て間違いない。

自分の存在を知って貰いたいという宿主の思いが、幻魔を突き動

かした結果だろう。

効果の程は悩める早苗の姿通り、知って貰うを通り越して、別の意味で意識されるまでに至っている。

こう評すと欲の対象者はどうあれ、幻魔は宿主にとって、とても友好且つ有能な存在のように思えるが、実際には害でしかない。

何故なら幻魔は宿主の欲が叶った時、それまで援助していた宿主の精神を内側から喰らい、欲の対象者が存命であった場合にはその肉までをも喰らって、現実に己の肉体を得るのだ。

人間だった頃の面影のない、人間には持ち得ない能力を有する、己の身体を。

そう、幻魔が自由を得られるのは最終段階での事。

それまでは産みの親の身体を借りているため、只人が幻魔に対抗するのは難しい。

まあ、宿主が死ねば幻魔も存在できなくなるのだが、血みどろの解決方法はそこそこ平和な世において、現実的とは言えないだろう。

では、宿主を生かした状態で幻魔だけを滅する、そんな巧いやり方があるのかと言えば　あるにはある。

だからこそ悠風は、便利屋の噂を頼る早苗を閑人に引き合わせたのだ。

彼こそが、その巧いやり方を実行できる便利屋の正体であり、悠風を御用聞きにした張本人なのだから。

しかし、この影浦閑人、横行する噂にあるような”便利”とは程遠い男であった。

上に暖色のニット地、下にベージュのロングスカートを着て出てきた悠風は、早苗を思っ下向きになっていた顔を上げると「お待ちませ」と言いかけた口を引き攣らせた。

着替えた姿に閑人が、「制服姿もイイが、こつちもそる」と彼の同類にしか判らないような、品のない賛辞を送ってきた。悠風の目は彼の手元を凝視したまま。

（そういえばこの人、目が覚めた開口一番に言っただよね。百歳先は じゃなかった、早苗さんは困っっているっていうのに）

ひらひらと閑人の手元で揺れる、五枚の紙。

長方形の中に描かれているのは、1を先頭に0を四つ連ねた数字。

それは閑人が早苗に要求し、彼女が支払った依頼料だった。

基本的にバイト禁止の高校にあって、早苗がその金額を持っていたのは偶然ではない。

依頼するからには、となけなしの貯金を前もって下ろしていたのである。

足りない分は後でなんとか工面しようとも考えていたらしい。

このため閑人が全額前払いと提示した料金を、早苗は「思っただけよりお安いんですね」と言い、快く払っただが、悠風からしてみれば依頼料を取る時点で、到底受け入れられるものではなかった。勿論、労働に見合う賃金はあつてしかるべきだと思っではいるし、閑人に慈善事業をして欲しいと思っている訳ではない。

幻魔という特異な存在が相手なら、確かに閑人の提示した金額は破格の安さなのだろう。

だが、悠風は知っている。

取れる物なら保育園児からでも取る、姑息な料金設定の先にある使い道を。

閑人にとって無価値の紙切れを請求する理由を。

だからこそ、閑人が心労尽きない依頼人から金をせしめるのを、彼女は歓迎していなかった。

だというのに悠風視線に気づいた閑人は、見せびらかすように持っていた紙幣を一瞥すると、にやり笑ってこう言った。

「悠風、何か欲しいモンあるか？」

「このっ……！ もも 早苗さんは、困っているから相談してきたっていうのに！」

「おいおい。何言っただ、お前？ こちとら慈善事業じゃねえんだよ。これくらいの出費、当然だろ？ でなけりゃ、何か裏があるって勘繰るのが人間。依頼主サマの不安を取り除いて差し上げるのが、当方の役目でございます」

噛み付く悠風に肩を竦めた閑人は、紙幣を懐に仕舞い、おどけた調子で恭しく一礼してみせた。

仰々しい道化た仕草には腹が立つものの、一理ある言葉に悠風の喉がぐつと詰まる。

(そりゃ判っているわよ。だって頼りの相手がこんなに胡散臭いんだもの。何かと引き換えじゃなかったら、幻魔以上に後々心配になりそうだわ。でも……だからって……)

言い返せない自分に苛立ち俯けば、頭上から落ちてくるやれやれと言わんばかりの溜息。

癪に障るそれを受け、再び悠風の顔が上がりかければ、それより先に伸びて来た閑人の指が、彼女の顎を上向かせた。

急な動きについていけず悠風が目を見開いたなら、横に隠れた閑人の唇が、粘着性のある低く甘い声を耳に落とす。

「それとも、支払いはあの嬢ちゃんの身体が良かったかい？」

「っ、なっ！？」

度肝を抜く内容に閑人の胸を突き飛ばせば、顔を上げた男はクツクツ笑いながら悠風の両手首を取ってきた。

振り解く間もなく、閉じたばかりの扉に身体ごと押し付けられては、長いスカートを物ともせず、足の間に納まる閑人の膝。

擦り寄る男の身体に惑い、密着する熱に「あっ」と小さな声が漏れてしまう。

そんな自分を恥じながらも、悠風は閑人を睨みつけるつもりでキツと顔を上げた。

しかし、遠くにあると思われた顔は至近にあり、青鈍の瞳と出逢った黒い眼は揺れに揺れる。

「悠風」

呼ばれた名、間を置かず唇を擦る呼気。

「か、閑人……何を……」

途端に、これまでの思考を止めてしまった悠風は、今にも交わされそうな口付けの予感に、然したる抵抗もせず唇を喘がせた。

その存在、その価値 その2

スカートの中に手を突っ込まれたり、尻を撫で回されたりする事はあまりないものの、セクハラ紛い いや、セクハラそのものの行為は、閑人によりほぼ日常的に受け続けてきた悠風。

そもその間違いは、二次性徴過程において変に意識するのも可笑しいと、幼い頃は何とも思わなかった彼の行為を甘受してしまっただところにある訳だが、そんな関係が続いているにも関わらず、露出している肌の中、一度として触れられた事のない場所があった。

それは今現在、閑人の吐息に舐められている 唇。

(ど、どうしよう……このままなし崩しにされてしまうの?)

指にせよ、何にせよ、今まで無事だったのが不思議なくらい、閑人から触れられた憶えのない其処。

正確には閑人どころか誰にも触れられた憶えはないのだが。

だというのに、初めて触れるところが閑人の唇である事に、悠風は酷く狼狽していた。

しかしそれと同時に、来るべくして来た、とも思っていた。

彼女は薄々、ファーストキスの相手は閑人になる、そう予感していたのだ。

叔父と姪なのに、という野暮な声は最初から悠風の方にはない。

元よりその関係とて戸籍上での事、二人の間には一滴の血の繋がりさえない。

犯罪級の年齢差にしてみても悠風が気にした事はなく、だからこそ彼女は触れるか触れないかの位置に、心をざわめかせていた。

(うう……どうしたら良い? 待ってればいいの? それとも私

から　はなんかやだし。か、閑人さん！　するならするで、さつさと済ませてよ！）
言えればそれだけで交わされそうな近さに、雰囲気台無しの叫びを内でする悠風。

斜め頭上の壁に固定された手首が、閑人の親指に撫でられては、出て行くこうとする声すら飲み込んで、その時をじっと待つものの、（こ、こういうのを蛇の生殺しっていうのかしら？　ああでもそれって女としてどうなの？）

焦らされれば焦らされるほど、仕様もない考えが悠風の頭の中をグルグル回っていく。
いっそもでも閉じてしまおうか、準備は出来ていると暗に示してしまおうか。

そんな風に思考が追い詰められてきたなら、更に閑人の身体が寄せられ、乗じて起こる刺激に悠風の首が竦められた。

と、ふいに閑人が笑い含みに言う。

「三人で愉しむってのもアリか」

（さ、三人って？）

「俺と悠風と、あの嬢ちゃんとき。ほれ、いつだったか見せただろう？　アレみてえに、男一人女二人でよオ」

悠風の心を読んだていで熱っぽく語りかける閑人。

皆まで言われずとも、「三人で愉しむ」意味を正しく理解した悠風は、「あの嬢ちゃん」と示された早苗を浮かべ、今の状況が依頼料から発展した事であると思いつ出した。

しかし、だからといって、悠風が我を取り戻して怒鳴り散らすかと言えば。

（閑人さんと、私と……早苗さん、も？）

現在の状況と件の佳人の妖しさが為せる業か、掠めた妄想に悠風の喉がこくと鳴った。

（　　）って、何考えているのよ、私。早苗さんの好きな人は、ちゃんと男の人だったじゃない。……じゃなくて！　そもそも三人とか、ううん、そうでもなくて！！）

続け様、正気を取り戻した悠風は、一瞬でも妄想に耽った後悔に苛まれつつ、閑人を睨みつける。

熱に潤んだ瞳では、ほとんど効果は望めないものの。

「駄目だよ、閑人。そんなの、絶対駄目。早苗さんの身体は早苗さんのモノ、だから」

「……ああ。判っているさ、んなモン。俺もコレで夢見がちな性分だからよオ？　心の伴わねエモンよか、はなっから心のねエモンの方がイイ。ってな訳で、この報酬は俺のモンでイイな？」

「……うん」

ぴらつと現れた五枚の紙幣に片手が解放されると気づいた悠風は、その手を胸の前に持つてくると軽く握り締めた。

本当は良いも悪いも、悠風に言う権利はない。

幻魔を相手にするのは閑人であって、彼女ではないのだ。

それなのに悠風が閑人が報酬を得るのを好まない理由は唯一つ。

彼が報酬の全てを悠風に費やしてくるせいだ。

悠風が好むと好まざるとに関わらず　。

そんな悠風から満足の行く答えを得られたからだろう、それまでの雰囲気はどこへやら、身体を起こした閑人は、紙幣を再び懐に仕舞うとほくほく顔で尋ねてきた。

「で、悠風？　出前にするか？　それとも買い物行って、何か豪華なモンでも　」

「ちよ、閑人さん！？　先に幻魔でしょ！？」

「アア？　何言ってるんだ、お前？　空腹を満たすのが先だろ？　昔からよく言っじゃねエか。腹が減っては戦は出来ぬって。こんなに

ぺったんこな腹で、幻魔なんか相手に出来ねエだろ？」

「相手つて、それは閑人さんが　ひゃっ!？」

伸びて来た手が問答無用で触れたのは、扉に張り付いたままの悠風
の胃の辺り。

胸の真下にある見えない指先には身じろげても、依然として左手
が斜め上方に押さえつけられていたなら、逃げることは叶わず。

「か、閑人さん、離して！」

蹴り上げたところでどうせ避けられてしまうため、胃に置かれた
閑人の手を引き剥がすように右手を添える。

するとこれを嫌うように手の平が下方へ移動していく。

「!」

撫でられる服越しの動きに悠風の息が詰まれば、再び近づいてき
た閑人の唇がぼつりと言った。

「前々から言おう言おうと思っていたんだが……悠風って着やせす
るタイプだよな」

「何をっ」

「身体の線がくつきり出る服だと、そこそこ増量して」

「ど、どこ見て　」

「胸」

「見んな！」

添えていた手を振り上げれば、ひよいと離れる閑人の顔。

乗じて腹部から手まで離れたなら、ほっとする間もなく囚われた
ままの手首がぐつと引かれた。

「きゃっ」

反動でダンスでも踊っているかのようにくるりと身体が回転すれ
ば、閑人の身体を背後に感じて意味なく熱が上がっていく。

回された手が腹部に戻ってきてても、悠風の意識はこれを捉えきれ
ず。

「！ か、閑人さん……」

それもそのはず、早苗に掴まれた赤みを残す右手首に、閑人が唇を押し当てているのだ。

幾度となく寄せられる、かさついた柔らかさ。

舐めるでも、啄ばむでもないソレをぽーっと眺めていたなら、悠風の見線に気づいた閑人が唇の感触を馴染ませるように、あるいは消すように、親指で口付けていた箇所を擦っていく。

「あの嬢ちゃんに付けられた痕だろ、コレ。余程切羽詰ってたんだろうが、俺の悠風にこんなモン付けたのは頂けねエ。つつう事で、俺は飯を優先する」

「誰が閑人さんのですか、誰が！」

きっぱり断言する閑人に、緩くなった拘束から手首を取り戻した悠風が叫んだ。

ついでに身を擦って向かい合えば、面白くなさそうに息をついた閑人が頭を掻いた。

「皆まで言わせたいってんなら、言っちゃらん事もないが」

「……結構です。聞きたくありません」

否定にぶいっと横を向く悠風。

「だろ？」

閑人は知った風にそう言うと、掻く手を下ろして悠風の頭を軽く撫でた。

今更ご機嫌取りもないだろう、そう思って悠風が睨みつけたなら、にやっと笑った閑人が言う。

「で、悠風。何が喰いたい？」

「……はあ」

結局、どれだけ言っても堂々巡り、夕食を優先させる閑人へこれ見よがしに溜息をついた悠風は、小さく首を振って撫でる手を払うと、「あるもので、適当に」と答えた。

階下へ向かいつつ「りょーかい」と請け負った閑人は、しかし足を止めると、後ろに続くつもりだった悠風へ告げる。

「そーいや悠風、言ってなかったな」

おかえりの行方

仕事で不在の父と病ゆえに家にいない母。

物心ついた時、彼女の生活にはいくつかの”当たり前”があった。それが他の家庭と少し違う”当たり前”だと知ったのは、母の死後、父が再婚した時の事。

今まで仕事の鬼だった新しい母は、幼い彼女を思つて慣れない家庭に数日間入り、そしてまた仕事に戻つていったのだが、その間、とても不思議な挨拶を彼女にしていた。

学校から帰ってきた彼女に対して、「おかえり」と。

彼女にとつてソレは、帰ってきた父を迎えるための台詞であり、返す「ただいま」は帰ってきた父の台詞。

なのに新しい母は当然のように彼女へ「おかえり」と言い、これを聞く度、彼女は胸を痛めたものである。

(あねかあさんは、ゆうのことがきらいなのかな……)

たかが挨拶、されど自分の役割を取られたと、小さいながらに彼女は思つてしまったのだ。

これが勘違いだと判つたのは、新しい母が仕事に戻る前日、日中だけでも彼女を預かるよう、半ば強制された叔父と出会つてから。

階段でわざわざ振り返り、何を言うのかと思えば「おかえり」の

一言。

「ただいま」とは返したものの、虚を衝かれてしまった悠風は、居間のテーブルに頭を乗せながら、ぼんやり昔の事を思い出していた。

あれは、小学校から真つ直ぐ迷鏡堂へ行くようになった数日後。

母と同じく「おかえり」と言つて迎える閑人に、その日、とうとう我慢できなつた悠風は、鞆を投げつけ怒鳴り散らした。

「おかえりはゆうがいうの！ ただいまもいちとうさんのの！ かんじんはいつちゃだめ！ ゆうもいわないの！」

優しい母には言えなかつた事を言えたのは、相手がいい加減そんな閑人だつたからだろう。

対し、投げられた鞆を胡坐をかいたまま片手で受け止めた閑人は、眉根を寄せて「アア？」と不機嫌な声を上げた。

途端に悠風がビクついたなら、閑人は仰々しい溜息をついて立ち上がり、怯える彼女を有無も言わず抱き上げる。

父に抱き上げられた時より高い視界に悠風の目が丸くなれば、彼女を足の上に、再び胡坐を搔いた閑人は言った。

「お前、何か勘違いしてねエか？」

「……かんちがい？」

「ああ。あのな、おかえりつてのは、家にいる奴が外から戻ってきた奴に言うんだよ。よく帰ってきたつてな。で、ただいまつてのは、外から戻ってきた奴が家にいる奴に言うんだよ。今戻ってきたぞつてな」

噛み砕いて説明する閑人の顔をじつと見つめていた悠風は、自分なりにソレを頭に入れると、おもむろに無精ひげの頬へぺたつと手をくつつけた。

「……じゃあ、かんじんは」
「うん？」

「ゆうがかえってきてうれしい？ よくかえってきたって、よろこんでくれる？」

「そうだな。とりあえず、いきなり鞆を投げつけてきたり、ただいまと返さなかつたりしねエならな」

「ごめんね？ もうしないから」

「そうか？ なら、イイ。よく帰ってきたな、悠風」

「うん。ただいま、かんじん」

髪をくしゃくしゃにされたものの、頭を撫でられるのが好きだった悠風は、この後しばらく閑人に抱きついたまま。

そうして「おかえり」の意味を正しく知った彼女は、掛けられる言葉のくすぐったさも同時に知り

だからなのか、あれ以来、律儀に「おかえり」を忘れず言い続ける閑人へ、悠風は小さく息をついた。

テーブルから返ってきた温もりが唇を湿らせれば、余計に大きな吐息が零れていく。

（結局、ファーストキスにはならなかったなあ。閑人さんって、いつも変なところで手を引くよね。……って、これじゃあキスしたかったみたいけど）

身体を起こし、翳した指に火照った息を吹きかける。

思い起こしても、今より少し若いだけであまり変わらない閑人の姿に、悠風の気分が少しだけ傾いだ。

（まあ、そりゃそうだよな。今じゃ完全にセクハラばかりだけど、それだって昔の延長線みたいなものだし。際どい台詞にしたところで、閑人さんにとってははからかっているだけ。たちの悪さは折り紙

付きだけど、実際、本当に、そういう目で見られた事ないもの。キスの予感にしても、拍子の事故でありそうっただけ。あんな雰囲気の中じゃ、まずない話よね)

異性としてみられたいとは思わないが、何とも思われていないのは、それはそれでもやもやする。

複雑な乙女心を抱えた悠風がもう一度溜息をつけば、湿った手が大きな手に包まれた。

見上げたなら野菜炒めを手にした閑人が、それをテーブルの上に置きながら困惑気味に眉を寄せた。

「寒いのか、悠風？」

どうやら意味もなく手の平に息を吹きかけるのを見て、部屋が寒いのだと解釈したらしい。

擦る温かなくすぐったさに首を振った悠風は、からかいはしても大抵過保護な閑人に「違う、大丈夫だから」と言うと、用意された野菜炒めに箸を伸ばした。

夕飯を執拗に勧め、自分で作りもしたくせに、何も食べなかった閑人は、食べ終わった悠風が食器を片付けるのを見計らい、居間のソファから身を起こした。

待っている間、見るともなしに見ていたテレビを消すと、軽い柔軟をして悠風へと視線を超越す。

「よし。じゃあ、とつととやんぞ」

「うん……」

閑人の「やる」が百歳を脅かす幻魔の退治だと知っている悠風は、

しかし、夕飯前に急かしたのが嘘のように渋い顔をしていた。
百歳を助けたい気持ちには、今も変わりはない。
だが

(毎度毎度……はつきり言って私が行く必要ないよね)

ついて来ると信じて疑わない閑人の背を追い、自宅に鍵を掛けて
迷鏡堂へ行く中で、そんな事を悠風は思う。

キスされるかどうかの瀬戸際ですっかり失念していたものの、悠
風の夕飯を優先させたところで、閑人が彼女を待つ必要性は全くと
いって良いほどなかった。

何せ彼一人でも、いや、彼一人の方が幻魔を退治するには都合が
良いのだから。

だというのに閑人は、毎回幻魔退治に悠風を連れて行く。

悠風がどんなに足手纏いになると主張しても、実際何の役に立た
なくても。

時には邪魔にしかならないというのに、懲りもせず。

「悠風」

「あ、うん」

呼び声に応えて見やれば、迷鏡堂の扉を開ける姿。

暗に入れという動作を受けて先に店内へ入った悠風は、主不在で
も照らし続ける光に目を細め

「おかえりなさい、悠風殿」

「きやあっ!？」

誰もいないと置いていた店側からの、突然の抱擁。

ついでに尻まで撫でられたなら、相手が誰であるかを察し、その
胸板を思いつき突き飛ばした。

が、意外に強い腕の持ち主は離れる事もなく、逆に悠風を責める
ていで引き寄せてくる。

両手で臀部を鷲掴みながら。

「いつやああつ！ 止めて下さい、訴えますよ!？」

閑人が触れていた時以上に嫌がる悠風が、もぞもぞする尻に身を擦りつつ睨み付ければ、その先で目を閉じた男が口元だけを微笑ませた。

「久しぶりにお会いしたというのに、なんとつれないお言葉。このまま足を割って強引に捻じ込みたくなくなってしまっただけではありませんか」「ひいつ!?! い、言いつつ足を捻り込ませないで下さい! っていつか放して!！」

「そうは申されましても、この、若さの為せる弾力性は何とも手放し難く おつと?！」

悠風がどれだけ叫んでも離れなかった男は、彼女へ摺り寄せていた身体を唐突に後方へ離れた。

その理由が、悠風の後ろから男の顔面目掛けて起こった強烈な一打だと気づいた頃には、彼女の身は閑人の腕の中に在り。

「てめエ……焔^{ほむ}。誰が悠風のケツに触れてイイと言った?！」

「ちょ、閑人さんっ!？」

「おや? では、お許しを頂ければ触り放題だと」

「んな屁理屈通るわけねエだろ? つうか、お前……毎度毎度、無断で人ン家入りやがって」

「だってえ、開いているんですもんっ! 駄目ですよお、影浦殿お。最近物騒なんですから、戸締りはきちんとしなきゃ、めっ!」

やたらと身体をくねくねさせ、最後に至っては腰に手を当て前屈みで、人差し指を振る男・焔。

「野郎……どうやらマジで殺り合いてエようだな?」

音がしそうな怒りを貼り付けた閑人は、青筋を立てながら握り拳を翳し、臨戦態勢を取る が。

「いい加減にしろ、このド変態ども!！」

「いつ、てっ！？ 甲を抓るな、甲を！ 地味に痛エぞ、悠風」

引き寄せると同時に焰と同じ行動を取り始めた閑人へ、ようやく効果的な攻撃を加えられた悠風は、二人の男から距離を置くと、フーッと荒い息をついた。

化生のもの

常では冷やかしの客さえ寄り付かない迷鏡堂。

だというのに、主人もいないそこへ勝手に一人で入り、悠風たちをのほほん待っていた焔。

一見すると、墨色の髪と下弦を描く閉じた瞳、黒スーツ姿の優男だが、彼は見た目通りの人間ではない。

もつと言えば文字通り、人間ではなかった。

焔属するその存在

これを悠風が知ったのは、彼と知り合うずっと前。

閑人と過ごすようになった、ある晩の事だった。

切っ掛けがなんだったのかはもう忘れてしまったが、その日、悠風は唐突に疑問に思ったのだ。

(どうしてかんじんは、ごはんをたべないのかな?)

学校にいる間は判らないものの、悠風が帰ってからは、何かを食べる素振りもない閑人。

夕飯作りでも摘み食いなどしない彼は、悠風が食べている時も見ているだけ。

お腹が空くと元気がなくなってしまふ悠風には、とても不思議な事だった。

そしてその疑問は、何のクッションも置かずに、そのまま悠風の

口から出て行った。

「ねえねえ、かんじん」

「んー？」

「どうしてかんじんは、ごはんをたべないの？」

「あ？ 喰ってるぞ」

寝転がっている後ろから覗き込むようにして問えば、簡潔な答えがやってくる。

これをふざけているのだと感じ、膨れっ面をした悠風は、真面目に答えて欲しい一心で、閑人の脇腹から身を乗り出した。

「ええ？ だつてかんじん、いつつもたべてないよ？」

「喰ってるんだよ。悠風のいないところで、ガリガリバリバリムシャムシャと」

「……それっておいしいの？」

「まあまあだな。つつても、悠風には美味しくないだろうな」

「ええ？ どうして？ ゆう、すききらいしないよ？」

「そういう問題じゃなくてだな……つて、おい。危ないからそれ以上身を乗り出すな」

「やだ。かんじんが、なにたべてるのか、おしえるまで、ゆうは

ひゃあ！？」

「つつお！」

乗り出していた上体が頭から落ちれば、咄嗟に両手を伸ばした閑人が悠風の肩を押さえた。

畳との激突は免れたものの、「教えなきゃもう一回やるぞ」という目で閑人を見た悠風。

急な動きをしたせいで、体勢を立て直すまでに時間を要した閑人は、怒るタイミングを失った事に肩を落とすと、悠風を自分の隣に

横たえてから、人差し指を口元に持っていった。

「判った判った。教えてやる。けど、これは悠風と俺との秘密だから、誰にも言うなよ?」

「ひみつ? いちとうさんにも?」

「ああ」

「あねかあさんにも?」

「勿論だ。つうか、特にアカ姉ネエには絶対言うな。後が怖過ぎる」

「うん、わかった。あねかあさん、やさしいけど、かんじんにはきびしいもんね」

「そういう事。まあ、どうせその内、アカ姉からも言われると思うんだが。……アイツの性格からして、弟に先越されたって知ったら暴れるだろうからなア」

「そうなんだ。じゃあ、指きりげんまんしょ?」

「おお、いいぞ。ほれ」

頬杖を付いて差し出された大きい小指に、寝転がったまま小さい指を絡める悠風。

自分の節で手を揺らしていけば、閑人が歌うよう促してきた。

ゆーびきーりげーんまーん、うっそついたら

ゆうがかんじん、まもってあげる

ゆーびきつた!

「……おい? 守ってあげるってお前、どうやって?」

「うーん、とね。なんかいつぱい?」

「いつぱい?」

「うん。いつぱい。あねかあさんからもまもってあげるし、ほかにもたくさん、まもってあげる」

「そーかそーか。つまりお前、約束破る気満々なんだな?」

「ち、ちがうよ？ ゆうはいわないよ？ でも、あねかあさんにわからないようにするのが、とつても、とつても、たいへんだから」

得意げに言えばじろりと睨まれた悠風。

たじろぎながらも、折角の聞けるチャンスを逃してなるものかと弁解を図ったなら、クツクツ笑った閑人は彼女の頭をぼんぽん撫で叩いた。

「判った判った。じゃあ教えてやる。その代わりに、破ったら絶対、だからな？」

「うん。ぜつたい。それで、かんじんのひみつって？」

神妙な顔で頷きつつも、好奇心を隠せないキラキラした瞳で見つめれば、「ホントに判ってんのか」と意地悪く笑いながら閑人は言った。

「実はな、俺は人間じゃないんだ」

「えっ、じゃあやっぱりオニ？」

「おいおい。何で人間じゃなかったら、即・鬼になんだよ。しかもやっぱりってお前、そこまでヤバい面してたか、俺？……まあ、似たようなモンだが。って訳だから、俺の喰いモンは悠風と違うモンで」

「じゃあ、ゆうのこと、バリバリ食べるの？」

「アア？ 違エよ。似たようなモンであって鬼じゃねエし、そもそも人間なんざ喰わねエ。変な想像力働かせんな」

ぼんぽん出てくる言葉に呆れた様子の閑人は、不思議そうな顔をした悠風の頭を柔らかく撫でていく。

これに擦り寄るでいで近づいた悠風は、覗き込むようにして青鈍の瞳を見つめた。

「じゃあ、かんじんはなに？」

「うん？ 俺か？ 俺はなア、化生けしょうのものだ」

「けしょうの、もの？」

難しい響きに悠風が首を傾げれば、そんな彼女を抱え、仰向けになつた閑人。

頬杖に疲れた手を解すように悠風の背を撫で、幼い顔が這い上がってきたなら、その頭を自分の首に埋めさせた。

まるで無垢な瞳に、真つ直ぐ射られるのを嫌うていで。

「そう。判り易く言や、魔獣・怪獣・妖怪・妖精・精霊・幽霊

等等。常識ぶつた大人が言う、空想上の生き物の総称だ。だから鬼も含まれている。種類は可愛らしいのから、寄つて欲しくない奴まで色々。能力も人智を超えたのが多い」

「じんち？」

「ああ。たとえば、火のないところに火柱を立ち上らせたり、青天の霹靂どころか真夏の太陽の下に馬鹿でかい氷玉を降らせたり出来る。人間じゃ道具を使わないと出来ないだろ？」

「すごいね。まほうみたい」

「だな」

「じゃあ、かんじんはまほうがつかえるんだ」

「いいや俺は……いや、使えねエこともねエか。そうだな。アカ姉がイイって言つたら、今度見せてやるよ」

「ほんとう!？」

それまで閑人に撫でられるがままだつた悠風が、期待に満ちた顔を上げると、虚を衝かれた青鈍の目が苦笑する。

「ああ。オレサマの名にかけてな」

そう告げる閑人へ、悠風は何度も「絶対見せてね!」を繰り返す。

無論この後、魔法につられて閑人との約束をすっかり忘れてしまった悠風は、一日と持たずにこの話を母にしてしまうのだが、それはそれとして。

化生けしやうのもの

それは、ともすれば類稀なる神秘性を持つ、幼い子どもが夢見るような存在。

だがしかし、今現在の悠風にしてみれば、人間の世俗に塗れた変態の総称でしかない。

閑人は元より、彼経由で知り合った化生のもの・焰にしても、最初は気の良いお兄さんだったはずが、年と回を重ねていく内、悠風を男として苛めたくなってきた、と本人の前で平然と言うのだから。

だからこそ悠風は、出会い頭に撫で揉み回された尻を両手で隠しながら、元凶である男二人を左右に睨んで言った。

「さつきからスベスベだの、弾力性だの、人のお尻を何だと思ってるんですか！ 貴方がたみたいなお尻フェチのおもちゃじゃないんですよ！？」

「それは違うぞ、悠風」

「それは違いますよ、悠風殿」

すると二人の男は、それまで言い合っていたとは思えない調子で、声を合わせて首を振った。

双子のようなその動きに、何が違うと悠風が睨めば、大真面目な顔でまず閑人が力強く言う。

「尻だけじゃない、俺は女の肉感全てが好きだ」

「……は？」

（何の告白？ っというか、なにその無駄に堂々とした態度）

対処し切れない脱力感に苛まれ、庇う手を忘れて悠風が呆然とすれば、続いて焰も同じ様に言う。

「ええ、そうですとも。悠風殿の魅力は臀部だけに留まりません。

瑞々しい唇も、臀部以上に揉みがいのある胸も、擦りたくなるような太腿も、秘められた花園も その全てが僕の大好物。それを玩具だなんて、そんな……そんな卑猥な表現をするなんて、悠風殿も案外好き者ですね。僕はいつでも大歓迎ですよ？」

「ひいっ！？ 私はご遠慮申し上げます！」

どれだけ距離を取っても足りない、焰からのラブコール（舌なめずり付き）を受け、反抗心を一気に削がれた悠風は、閑人の元へ逃走。

「焰……言い過ぎだ。悠風が萎縮しちまうだろ？」

後ろに回ってしがみつけば、悠風の頭へ当然のように手を置いた閑人が、呆れた声を焰へ投げかけた。

悠風にしてみれば、どちらの言い分も十二分に変質者。

それでも信頼の度合いは、閑人の方が遙かに高い。

従って、思うところはあっても、閑人の言う通りだと更に身を寄せせる。

そんな彼女の様子を受け、やれやれと首を振った焰は「悠風殿つたら、恥しがり屋さんなんですから」と検討違いも甚だしい事を懲りずに呟いた。

出発、のその前に

居間に続く踏み板へ腰を下ろした焰は、まるで自分こそが迷鏡堂の主だというように、立ったままの悠風と閑人へ問いかける。

「それで？ 今から行くのですか？ 百歳早苗に取り付いたという幻魔を排除しに」

「相変わらず、耳が早エな」

「耳ではなく目、ですがね。幻魔臭い輩が此処へ入っていくのが視えましたから」

焰は閉じた瞳を閑人に向けると、嫌そうな顔をして袖口を口に当てた。

化生のものである焰には、瞼を下ろした状態でも、悠風たちが視えているという。

ただし、今の優男の姿が彼の本当の姿とは言い切れないため、どういふ風に視えているのかまでは、人間である悠風は勿論、閑人にも判らないらしい。

判るのは、いつ何時でも幻魔を感知できる程、彼の視野が広い事だけ。

そんな視野に入ってくる幻魔を何故か毛嫌いしている焰は、ここで一旦、表情に笑みを戻すと、当てていた手も下ろして悪戯っぽく言った。

「とはいえ、早いというなら影浦殿の方ではありませんか？」

「アア？」

「いつもなら、もう少し日を置いて様子を見るというのに、この対応の早さ。百歳早苗……美人でしたよねえ？ しかも悠風殿とは趣の異なる秀逸な曲線美に、影浦殿の大好物である制服とくれば、それはもう」

「ああ。否定はしねエな。女に美人であるの身体つき。三拍子揃って十分なところを、制服で納められちゃったら、これはもうやる気出すしかねエだろう？」

（この人たちって……それしか頭はないのかしら？）

にやにや似たような顔で、好き勝手並べる男二人に頭痛を覚えた悠風は、それとなく閑人から距離を取った。

焰が言う通り、閑人の依頼の受け方とこなし方には、彼の偏見によつて優劣の差があった。

良い働きっぷりをする条件を上げるなら、第一に依頼人は女である事。

第二条件は依頼人が肩書き付の制服を着ている事だ。

要は閑人、尻フェチではないが、制服にやる気を出すタイプだった。

今回の百歳を例にとれば、性別・女で、女子高校生の肩書き通り制服で来た事が効いたらしい。

オポジション扱いではあるものの、美人でプロポジションが良いのも、閑人のやる気に火を点けたようだ。

いつもなら第一・第二条件を満たしていても、一日くらい間を置くとこのように、言われてみればこの早さ。

（そうだった。閑人さん、いつもはもつと腰重かったんだ。もも

早苗さんの話を聞いて、急かす事ばかりに気を取られていたけど話を聞く時は眠っていたくせに、そうよね、この早さは異常だわ）いつもであれば、どんなに急かしても動かない閑人の、稀に見る行動力の高さに気づき、早く解決して欲しいのとは裏腹に、もやもやした気持ち再び悠風の胸に宿っていく。

不可思議な自分の思いに顔を顰めた悠風は、これが何なのか知るのを嫌うように、もう一步、閑人から身体を離れた。

するとそんな悠風へすかさず閑人の手が伸ばされる。

ぐいつと無造作に引き寄せられ、頭が厚い胸板を叩けば、こちらを見ないまま閑人が焰へ言った。

「だが、勿論それだけじゃねエさ。何せ相手はコイツ憧れの先輩様みてエだからな。さっさと終わらせてやるうと思つてよ」

「閑人さん……」

「なるほど。悠風殿絡みでは、百歳早苗の美貌もあまり関係ありませんでしたな」

思いの外あっさり晴れていく、胸のもやもや。

宿った時同様、不可思議な移り変わりに、悠風が小さく息をついたなら、にやつと笑う気配が閑人からやって来た。

「いいや？ アレくらいの美人だからイインじゃねエか。悠風が成功した暁にはどつちが上で下か、焰よ、賭けてみるか？」

「？ 私が成功？ 閑人さんじゃなくて？」

突然の不可解な話。

悠風が何の事かと首を傾げれば、それより先に手を打った焰が、訳知り顔で優雅に微笑んだ。

「おお、それはそれは。悠風殿もなかなかどうして、隅に置けない方ですね」

「？ 私が、何？」

一人、ついていけない現状に困惑すれば、悠風を話題にしながらも理解を待たない二人の男は、人の悪い笑みを浮かべて話を続けていった。

「それでは僕は」

「無論、俺は悠風が下に賭けるがな」

「そんな！ 卑怯ですよ、影浦殿！ 僕だつてそちらに賭けたかったのに！」

「ハッ、ごういうのは言ったモン勝ちなんだよ」

「くうっ！ こうなったら、悠風殿に僕が持ちうるテクを全て伝授してっ」

「だーから。悠風には手エ出さなっつってんだろ？ で、どうする？ 掛け金は」

盛り上がる二人を前に、耳にした情報をかき集めた悠風は、気になる単語をピックアップすると、何の話をしているのかを推測する。
(私が成功した暁……上下……私が下……焰さんもそっち……伝授……手を出すな……ん？ あれ？ この感じ、今日もどこかで) 頭の中で聞いた言葉を分解し、整理する。

似たような事やっていたと思えば、みるみる内に閑人と焰が何の賭けをしようとしているのかを知り、悠風の拳が握られていった。

(つまりこの人たちっ！)

怒りを込めて腕を振り上げれば、それは閑人に避けられ、悠風の身体をぐるりと回す。

「うおっと、悠風？」

容易く避けたくせに、彼女が暴力に訴えた理由は察せないのか、戸惑う閑人の声。

これを聞いて益々目を吊り上げた悠風は、真正面から叔父の顔に指を突きつけて吠えた。

「言っときますけどね！？ 私は百歳先輩にそんな感情抱いたりしませんから！ 百歳先輩だってそうです！ 大体、百歳先輩、言っただじゃないですか！ 好きだったのは男の人だって！ 私だってそうです！ 私だって」

ここですうっと息を吸い込んだ悠風。

しかしそれは冷静になるためではなく、声を張り上げて主張するためであり。

「私だって、男好きなんですからあつ!!」

「男……」

「好き……」

興奮した悠風言葉に、呆然とする男が二人。

自分が何を口走ったのかも未だ判らず、肩で息をする悠風に対し、閑人と焰は互いに顔を見合わせると、どちらともなく視線を逸らした。

「あー……じゃあ、その、なんだ。行ってくる」

「え、ええ。どうぞ。朗報をお待ちしております」

「俺に限ってしくじりはねエよ。ほれ、悠風。行くぞ」

悠風の頭に置いていた手を肩へ回した閑人。

赤い顔で睨みつける悠風からそれとなく視線を外しては、何も言わずにそのまま来た道を引き返し、入ってきたばかりの玄関と対峙する。

悠風は腹に堪った怒りをまだまだ閑人たちにぶつきたいところだったが、ふっと吐かれた息を聞くなり、燻る苛立ちごと唾を飲み込んで、何の変哲もない玄関口を凝視した。

俄かに緊張を帯び始めた彼女を回した腕に感じてか、安心させるように肩を叩いた閑人は、おもむろに引き戸へ手を押し当てると、窓越しの闇に浮かぶ自分を見つめて口を開く。

『鏡、鏡、お前は誰か。鏡、鏡、お前は私』

発せられる声は悠風の正面、窓の向こうから。

対し、応える声は悠風の隣、閑人の喉から。

「だから俺は、お前に”世界”をくれてやる」

閑人が傲慢にそう言い放てば、闇に浮かぶ閑人も同じ顔で不敵に笑った。

と同時に、その姿が周囲の闇ごと薄まっていったなら、現れ始め

る光景は

「ああっ!!」

「うおっ!?! ど、どうした、悠風?」

引き戸の窓越しが完全に変われば、いきなり素っ頓狂な声を上げた悠風に、閑人が必要以上に驚く。

「悠風殿?」

後方、焰までもが不思議そうな声を悠風へと投げかけたなら、二人を交互に見た彼女は、顔を赤と青で行ったり来たりさせつつ、大きく頭を振った。

「いやあの……で、訂正させて下さい。わ、私、別に男好きでもありませんからっ!」

今頃になって、猛然と主張した言葉が異様だった事に気づいたらしい。

最終的に悠風が顔を赤に決めて息を切らせば、互いの顔を見合わせた閑人と焰は溜息をついた。

「……ああ、アレか。つつかお前、これから行くぞっていつ時にぶり返す話か?」

「だ、だって」

「全く。律儀ですね、悠風殿。こちらはスルーして差し上げたというのに。アレですか? そのネタで虐めて欲しいという前振りですか?」

「そんなわけないでしょう!? 私に変な性癖を求めないで下さい

! 閑人さんじゃあるまいし」

「俺?」

呆れる二人の視線に挟まれ、悠風が指を差せば、自身を指差して閑人が首を捻った。

何を言われているのか判っていない顔に、カチッと来た悠風は、

自分の不要な発言を亡失させるでいい、閑人を睨みつけた。

「ご、ご主人さまっていうアレです！ 早苗さんにまで言っていて！ 絶対誤解されちゃったじゃないですか！」

「ああ……アア？ 何言ってるんだ、お前？ 俺は事実を述べただけだぞ？ 関係を聞かれたから、正しく答えてやっただけだ」

閑人が胸を張る勢いで断言すれば、悠風はその胸倉を掴んでビクともしない身体を揺さぶった。

肩を抱かれている自分だけが揺れている状況もかえりみず。

「ど、どこが正しいって言うんですか！？」

「どこっってお前……うん？ なんだ、そういう事か」

一人得心いったと頷いた閑人、悠風の肩から腕を離しては、彼女の手を取って真っ直ぐに言った。

「つまり悠風は、ご主人さまと下僕じゃ不服、奴隷だって言いたくないんだな？」

「ちっがうー！！」

「ほおほお。扱い最低だろうが奴隷じゃ人間、ブタが打倒だと？」

「何でそっち！？」

「ああ、そうか。ブタは有用だもんな。しかし、ゴミやクズじゃ、ご主人さまの優位性がイマイチ発揮されんぞ？ どうすりゃいいんだ？」

「……もういい」

どうあっても変わらない上下関係に、説くことを止めた悠風は、苛立ちに閑人の手を払うと、拳を作って力を込めた。

鏡よ鏡

”人の世に溢れる、実在の有無を問わない、人智を超えたもの”

化生のものの定義がそれならば、影浦閑人は何の化生か。

同じ化生のものにしても、焰は遠い昔、自然じねんに生じたといい、対する閑人の生まれは、列記とした人間の、とある一族の中。

何代か前に化生のものの血を混じらせたこの一族には時折、隔世遺伝というには些か高い頻度で、その血筋を色濃く受け継いだ子が生まれる。

ただし、産まれながらにして化生のものの能力を持っているかと言えは、そうではないらしい。

事実、今では飴色の髪と青鈍の瞳、土の気の肌をした閑人、古いアルバムを紐解けば、黒髪黒目の至って健康そうな肌で写っていた。

彼が今の色彩に近づいたのは、大学に通い始めた頃。

それまでも段々と明るくなりつつある髪色、青が滲んできた瞳、病気を疑われそうな肌は認めていたため、何も知らない周囲の心配を余所に、閑人は緩やかに進む己の変化を受け入れたという。

一族に伝わる化生のものの血筋　小さい頃から聞かされ続け、眉唾物だと思っていたそれが実在し、自分の身に起こった事には驚いたものの。

しかし、髪や瞳、肌の色は変わっても、大学時代の彼にそれ以上の変化は起こらなかった。

化生のものの血筋を確実に継いでいる証拠が外見に現れても、閑人はまだ、戸籍通り人間だった。

それが一気に化生のものと為ったのは、迷鏡堂の主を継いでから。

以来、幻魔に脅かされる人間を時に救い、時に見捨てる閑人は、血筋に伝わる化生のもの力を使ってきた。人の内にある幻魔、それすら映し出せる鏡の化生としての

閑人が度重ねた歪な関係の話にいきり立った悠風は、不愉快な気分を抱えたまま、迷鏡堂を出て行った。

早苗の依頼を忘れたわけではないが、付き合い切れないと感じたのだ。

一方で、こんなに頭に血が昇っているのは、幻魔退治の時、自分がどんな失態を犯すか判らないとも思っていた。

閑人に怒りながらも、彼の邪魔になりたくはない悠風。

心掛は立派だったと言えよう　時はすでに遅くとも。

悠風がその事に気づいたのは、「悠風！」と鋭く呼ぶ閑人の、伸ばされた手を払った直後。

「あ」

迷鏡堂から外へ。

身体が完全に出てしまったなら、彼女は背後を振り返り、呆然とした面持ちで立ち尽くしてしまった。

眼前、本来ならば迷鏡堂があるはずのそこには、夜中でも明るいコンビニがあり。

「どつしよう。やっちゃった……」

勝手に開く自動ドアへ、吸い込まれるようにして入った悠風は、店内を見渡して頭を抱えた。

来客を告げる気の抜けた音が流れても誰も来ないカウンター同様、ひと気のない周囲。

普段は気づかない、電化製品の音だけが支配する空間。だというのに、漂う匂いは日常と差して変わらず。

「どこのコンビニだろ、ここ？」

途方に暮れた顔で、カウンターに腰掛けた悠風は、そのまま視線をガラス張りの雑誌コーナーへと向けた。

並ぶ雑誌はどこかで見たタイトルロゴばかり。

しかし可笑しな事に、どのロゴも一様に文字が裏返しになっている。

よくよく見れば、背表紙も開き慣れた右側ではなく、全部が全部、左側。

些細な変化だが知れば奇妙に映る光景だった。

そんな中で悠風が見つめ続けているのは、雑誌ではなく、その上のガラスである。

誰もいない店内にも関わらず、そこにはガラス越し、映る幾つもの影があった。

「あ、あの制服！ かなり着崩しているけど、うちの高校っぽい。ってことは、そんなに遠くないのかな？」

常人であれば居もしない人間の影に怯えるところを、明るく歓迎した悠風は、カウンターから飛び降りると目を留めた影の下へ。

至近でまじまじ見つめても、雑誌を立ち読みする強面の少年は、悠風に気づく様子もなく、食い入るように真剣に、その紙面を読み漁っていた。

「うん、やっぱりこの校章、間違いない。間違はなくうちの高校だ、けど……」

近づいた事で、少年が何を読んでいるのかを知り、思わず半眼に

なってしまった悠風。

上手く隠しているつもりなのだろうが、いかがわしいタイトルロゴが、陳列棚の上から半分近く覗いていた。

悠風の前に並ぶ雑誌と違い、きちんと読める文字列に自然と溜息が出てくる。

「それにしても、何で制服で読むかなあ？ お陰で助かったけど、明らかに成人向けでしょ、これ」

年齢制限に関して突っ込めないのは、閑人に見せられた映像のせいだろう。

なんともなしに「成人向け」と書かれた仕切りの、間にある本へ目を通した悠風は、具体的な内容が並ぶ煽り文に眉を顰めると、頭痛を抱えるていで頭を振った。

「老け顔なんだから私服にすりゃいいのに。しかも、何読んでいるか隠す割に、表情にしまりがなし」

散々な感想を呆れ半分に少年へ投げかける。

しかし、やはり少年はそんな悠風には気づかず、雑誌に顔を伏せたまま。

いや、そもそも先程から微動だにしていない。

ガラスに映った他の人影も、ぼんやりとした像を結ぶばかりで、一向に動く気配がなかった。

まるで、ある日の店内の様子がガラスに染み付いたかのようなのである。

とはいえ、自分の姿がガラス越しの相手に知覚できないと知っている悠風にとって、そんな気づきは最早過去のもの。

仕切り直しとばかりに溜息をついた悠風は、今為すべき事のためにコンビニを後にする。

次いで辺りを見渡した彼女は、現在位置に凡その検討をつけると、

一歩足を踏み出し、
「ととつ。違う違う。ここは鏡面だから、左じゃなくて右」
身体を反転させては、真逆の方向へつま先を降ろしていった。

迷鏡堂から奇妙な空間へと、迷い込んでしまった悠風の落ち着き
ようは、彼女の神経が人並み外れて図太いから、では勿論ない。
この空間が、閑人の造り出した”世界”だと知っているためだ。
かといって、閑人とはぐれた悠風が現在位置を把握できるように、
この”世界”はゼロから造り出されたモノではなかった。

平たく言えばこの”世界”は、現実を写し取って形成された、鏡
の中の世界なのである。

ただし、此処には動くモノ、たとえば人間や走行中の車は写し取
られておらず、存在してもいない。

それらは全て、閑人が不要なモノとして切り捨てている。
必要なのは、幻魔を此処へ誘き寄せるための背景のみ。

ガラスに映る人影は、此処が形成された瞬間に映り込んだ、現実
のその場所にある光景で、彼らが一樣に動かないのは、この”世界
”が現実の時間でも止まっているため。
つまり、此処から出ない限り、この”世界”にいる者は現実の時
間には戻れないのである。

そんな”世界”へ、只人である悠風が行くには、制約があって当
然だろう。

制約の内容は、閑人の存在と彼の招き。

この”世界”を造ったのが閑人である以上、存在の必要性は言わずもがな。

対し、招きというのは文字通り、呪まじないによって形成された”世界”へ、閑人が手ずから招く事を差す。

迷鏡堂から”世界”へ続く引き戸は、閑人が開けて初めて無事に通れるのだ。

現実の世界へ出た時のように、迷鏡堂を背にした状態で。

そう、悠風が見知らぬコンビニの前に現れてしまったのは、まさに、この招きの過程を飛ばしたせい。

鏡の中という不安定な”世界”へ入る際には、閑人という造り手の存在が必要不可欠。

にも関わらず、悠風は自分で引き戸を開け、どこへ繋がるのかも考えず怒り任せに出してしまった。

結果、彼女は迷鏡堂とは関係のないところへ飛ばされ、時間干渉のない”世界”の中で、余計な時間を喰っているのである。

この”世界”で異質な存在である悠風とは違い、飛ばされる危険のない閑人は、迷鏡堂の前で彼女の到着を待っている事だろう。

だからこそ悠風はひた走る。

向かう先では確実に、閑人が怒っていると知りながらも。

鏡の中の攻防 その1

「たーてたーてよーこよーこ、まーるかいて、ちよん」
「ううみゆみゆうむんん、むうぶう、痛っ！」

ここは閑人が造り出した”世界”の迷鏡堂前。

向かい合う二人の男女の内、にやにや底意地の悪い笑みを浮かべた方が閑人で、頬を擦りさすり、そんな彼を睨みつけているのが悠凧だ。

不用意に外へ出、飛ばされた先のコンビニから走ってきた悠凧に対し、両手を広げて迎えた閑人は、彼女が立ち止まる直前にその顔を手の平で挟み込むと、鼻歌混じりにぐにぐに顔を変形させていった。

勝手な行動をした仕置きのもりなのだろう。

元を正せば閑人の言動のせいなのだが、最後に頬を振りながら離れた彼にそう訴えても、大した効果は認められない。

それどころか、物言いたげな悠凧の顔に眉を上げた閑人は、ククツと喉を鳴らしながらこちらを見下ろしてきた。

「よオ、悠凧ア。どうも反省が足りないように見えるんだが？ 一人で勝手に行動して御免なさい、はどうした？ アア？」

からかい混じりの口調ではあるものの、ノンフレームの眼鏡奥は笑っていない。

じりじりにじり寄る圧迫感に、悠凧の足が少し引けば、光の反射で閑人の目が見えなくなり、変わりに映る、頬を引き攣らせたへっぴり腰の自分の姿。

受ける威圧は変わらないとはいえ、射る視線を回避できた悠凧は、恐る恐る口を開いた。

「ひ、一人で勝手に行動して、御免なさい」

「で？」

「で、つて？」

「お前のの一みそは、人に言われた事しか言えねエのか？ え？」

「いつ！ ちょ、止め、止めて！ 頭小突かないでよ！」

「おーおー、自分の言葉で謝罪出来ない鳥頭が、オレサマに命令するたア、イイ度胸だ。…… イイゼエ？ 小突くのは止めてやるよ。ただし！」

「な、何？」

（何か閑人さん、今日は一段と機嫌悪くない？）

以前、同じように別の場所へ飛ばされた時は、ここまで執拗に絡んではこなかった閑人。

突つつくのを止めた手がもう一方の手と共に、艶かしくバラバラ指を動かすのを目前にしながら、身構えた悠風は、今日一日の自分の行動を振り返る。

たぶん、原因はそこにあるはずだ。

（えーっと、朝は関係ないはずだし、今日は学校ある日だから日中も問題ないでしょ。つてことは放課後、早苗さんの話を聞いて、帰りが遅くなつたから？……でもそれは、抱き上げた事でなしのはずよね。報酬への文句にしても壁に押し付けられたし、夕飯後回しの際はお腹撫で回されたでしょ。焰さんのアレだって、その後同じ事されて……あ、でも、抓っちゃったんだっけ？ しかも今回飛ばされたのは、閑人さんの言つた事全部拒否して、止めようとした手も叩いちゃって……うわ、マズい）

閑人の理不尽な行動にはいつも、それ以前の悠風の行動が関係している。

ほとんどが言い掛かりにも等しい理由なのだが、それに慣れてしまっている悠風には、今更正そうとする気はなかった。

というか、過去に挑み、そして見事に惨敗していた。

かといって、大人しく受けるつもりも更々ない。

怪しく蠢く手を前に背中を向けた悠風は、走ってきたばかりの道へ足を踏み出していく。

無駄だと判っていても、逃げる。

それが増して閑人の癪に障ろうとも。

現実では迷鏡堂の左隣にある上谷家。

鏡の中である”世界”では、当然右隣になるわけだが、その敷地内で、塀を背に座り込んだ悠風は、虚ろな目を塀の外に向けていた。振り乱れた髪は汗ばむ赤い頬に張り付き、口端からは垂れた涎が白い線を作り始めている。

腹に回された両腕は、時折何かを思い出すようにビクッと跳ね、立てられた膝には力が入っておらず、徐々に地面へ伸びていく。

「……は、あ」

薄く開いた唇から小さな声が零れば、次第に光を取り戻していく悠風の瞳。

乗じて、ぎこちない動きで膝が引き寄せられたなら、これに額を押し付けた悠風は、震えながら唇を噛み締めた。

（酷いよ、閑人さん。幾ら怒っているって言っても、こんな事するなんて）

落ちる涙はないものの、腹の熱さを嫌でも感じさせる両手の平の冷たさに、意識を飛ばすまでされていた事が蘇ってくる。

捕まえられた腰、振り回され、迷鏡堂のガラス戸についた両手。

蠢く手の動き、どれだけ声を上げても許されず、力を失っていく足。

がくがく揺れる身体、擦ってもきつくなるだけの腹。

朦朧となる意識、ガラス越し、現実を映しながらも自分達を映すそこには、あられもない姿の少女と、その後ろでにやつく男の顔。

逃げ道を前に求めても、ガラスが胸の先を潰すだけで、幾度となく襲ってくる揺れに解放はない。

意味を為さない声に閉じる事を忘れた口から涎が垂れれば、寄り添い覆う身体に虚ろな目で懇願した。

「かんじん、止めっ」

舌足らずなソレへにやつと笑った閑人は、そうして悠風からようやく手を引くと、へたり座る彼女を扉まで持つていき、そこでじつとしてると捨て置いた。

幻魔退治に行くその背を、虚ろな目はどこまでも追い続けていたのだが、正気に戻っては闇の中、煮え返る思いに悠風の拳が地を打つ。

「くつ、あの性悪男め！ 人が脇腹くすぐられるの、本っ当っつに駄目だつて知つていろくせに！！」

顔を上げて真正面を見据えた悠風は、かさつく口元を袖で拭うと、扉を支えに、腹を押さえながらゆっくり立ち上がった。

笑い過ぎたせいで痛む腹筋に、「うっ」と小さな呻き声上がる。

頭を小突く代わりに執行された、閑人の仕置き　くすぐりの刑。

誰にも見せられない顔で、誰にも聞かせられない声で強要された笑いは、異様な疲れを悠風にもたらしていたが、正気に戻ればそれ以上に襲ってくる羞恥の元が腹立たしかった。

誰にも、というそんな悠風の痴態を、元凶の閑人に見聞きされて

しまっているのだから。

しかもガラス越しに笑われながら。

「ううー……絶対、仕返ししてやるんだからあつ」

仕置きとしてくすぐられる事は、今回が初めての事ではなく、従って、こう誓うのも今回が初めての事ではない。

かといって、誓い通り仕返し出来ているかと言えば、言うだけ夕ダの世界、単なる捨て台詞と化して幾年月。

それでもめげずに仕返しを口にした悠風、通りに向かって塀伝いに歩くと、どれだけ時間が経とうとも、同じ夜が続く道を覗いた。

「それにしても閑人さん、遅いな……」

ぼつり呟くのは、仕返しを誓ったばかりの相手を案じる言葉。

結局のところ、何を閑人にされても最終的に許してしまう悠風は、彼がない不安に胸の前で拳を握ると、塀の外に出て、その背中が消えた方角を見つめた。

いつもならば、幻魔を退治し終わっている頃のはず。

仕事に入るまでが長い閑人は、仕事に入った途端、それまでの重い腰を感じさせない早さで、幻魔を此処へ誘き寄せ、退治してしまう。

その理由を彼は以前、「悠風を待たせているからなあ」とうそぶいていたが、実際のところは判らない。

理由に挙げた悠風をわざわざ連れてくる、そもその理由も判らないのだから、元より答えの出ない話ではあった。

とはいえ、この遅さは悠風の中の不安を、時が経つほどに強めていってしまう。

（幻魔を見つけられない……なら、早々に帰ろうとするだろうし、幻魔を誘き寄せるのに失敗しても同じ事。じゃあ、幻魔が強かった？ 大怪我した、とか……ううん、此処は閑人さんが造った”世界”だもの。負けるなんてそんな）

昔、閑人が悠風に見せると約束した「魔法」。

それは、この”世界”の事であると同時に、此処だからこそ使え

る、閑人本来の能力の事。

卑怯という言葉が相応しい、反則的な能力は、幻魔のような半端者に敗れるはずもない。

約束通り見せて貰った「魔法」には、攻撃の要素はなかったものの、以来、悠凧は確信にも近い思いで閑人の勝利を信じていた。

が、それと心配する事とは、また別の話である。

(じつとしてるって言われたけど、また酷い目合わされそうだけど。へタすると邪魔になっちゃうかもしれない、けど……)

現実の夜よりも暖かく、風のない住宅街。

耳を澄ましても、鳴り響くのは痛いばかりの静寂。

覗き込めば映るガラス越しの日常に、自分一人、取り残されているような感覚。

「うん、さつさと帰って来ない閑人さんが悪いのよ。私は待った、待ちました！ だから」

閑人を追おう。

そう意気込んだ悠凧は、気分を高めるために握り拳を真上へ突き出すと、閑人の消えた方角に向けて駆けていった。

人智を超えた化生の能力を知りながら、彼が今、”何処”を走っているのかも考えずに。

悠凧はひたすら、地を蹴り続ける。

鏡の中の攻防 その2

悠風を追って”世界”に入ってからというものの、閑人の調子はすこぶる悪かった。

勿論、彼女が止める閑人の手を払い、勝手な事をしたのも原因の一つではある。

が、根本の原因は、あの男。

幻魔退治の前には必ずと言って良いほど現れ、いらん事を悠風にしてくる焰のせいだ。

「なアにが、もっと言動を謹んであげないと、悠風殿に嫌われてしまいますよ、だ。てめエにだけは、言われたくねエつつうの」

合流した悠風を上谷家の塀に隠してから移動する最中、ふつつつ沸く怒りに、人間にはない鋭い歯列を鳴らして愚痴る閑人。

胸糞の悪くなる口調を真似て、更に苛々が募れば、ぎゅっと握り締めた拳の中の温もりに、ビクツと肩が震えてしまった。

「ああ、クソツ！ そのせいでやり過ぎちまったじゃねエか、焰！ おまけにあんな顔までさせて……」

苦虫を噛み潰した顔が思い出すのは、勝手な行動をした悠風への仕置きに、彼女の弱点である脇腹をくすぐった後。

逃げないようガラス戸に両手をつかせた彼女は、人としてのたがが外れたような、かなり惨い顔、汚い声で笑っていたのだが、くすぐる手を止めた途端、放心状態に陥ってしまった。

上谷悠風という人格を失った虚ろな目に、それまで仕置きを面白がっていた閑人は、急に罪悪感を覚え、彼女の回復を待たず幻魔を探しに来たのである。

要は回復した悠風に非難されるのが嫌で、先に幻魔を退治する事で、過度の仕置きをなかつた事にしよう、という姑息な考えだった。

「つつたく」

握り締めていた手を払い、意識を幻魔に集中させた閑人。前方、広がる光景は、星を幾つか散りばめた夜空と、流れる早さで過ぎる建物の屋根。

現実で行えば超人扱いされてしまう身体能力を、如何なく発揮する閑人は、現在、建物の上を跳躍で結びながら移動していた。

と、眼鏡奥にある青鈍の瞳を細めた閑人が、胡乱げな顔つきとなった。

「……それにしても、随分と薄いな」

宿主の中にいる幻魔をこの”世界”へ誘き寄せるには、この”世界”から現実にいる宿主を探さなくてはならない。

そしてそのためには二つほど、前準備が必要だった。

一つは、幻魔による被害状況の把握。

もう一つは、その被害を知る者の視認。

今回の場合は、被害者である早苗自身が赴き、語っていたため、いつにも増して幻魔を誘き寄せやすい……はずなのだが。

「線が薄い……嬢ちゃんに憑いていた気配は、もっと濃かったよな？」

誰に呟くでもなく一人ごちる閑人、その目には、屋根の連なり以外のモノが視えていた。

紫色の、煙と見紛うほど薄い線。

ふわふわ宙を漂うそれは、早苗に伸ばされた幻魔の気配を閑人が”世界”へ取り込んだものであり、先には必ず気配の主が存在している。

ちなみに線の反対側にあるのは迷鏡堂だ。

現実の早苗に繋がっているのだから、当たり前と言えば当たり前。それでも、迷鏡堂前を通った悠風にこの線が見えていないのは、彼女が人間だからに他ならない。

だから閑人も、この線のことを悠風に話したことはなかった。

見えないなら知らなくていい。

元より、悠凧が幻魔の位置を知る必要はない。

彼女に必要なのはただ、閑人と共に”世界”に降り、その帰りを待つ事のみ。

”世界”の中にさえ居れば、迷鏡堂を空けても、悠凧の身に危険が及ぶ事はまずない。

そして、閑人の帰りを待つだけなら、悠凧が幻魔の手に落ちる事も、そうはない話だった。

幻魔を誘き寄せたと同時に排除する　それだけの力が閑人にはあるのだから。

しかし、今回に限って言えば、誘き寄せる前段階、”世界”の中から幻魔を探すまでが大変そうだ。

ただでさえ、ストーカーという執着心たつぷりの宿主の幻魔、加え、早苗にあれだけの気配を纏わりつかせているのだから、その線は濃く、太いとばかり思っていたというのに。

(それもこれも焰のせいなら、更に胸糞が悪くなるんだが……それじゃあいけねエ)

化生のものの能力は、その時々で精神面で大きく左右される性質がある。

焰への怒りはそのまま閑人の破壊力となり、幻魔を討つ際に有効となるうが、今は邪魔でしかなかった。

幻魔の探索に必要なのは、微かな気配でも察知できる冷静さ。

細く薄い線の原因を自身の中に認めた閑人は、移動しつつ深呼吸すると瞳を閉じ、ゆっくり開いていった。

「……ちつ。余程腹に据えかねてんのか、俺」

結局変わらない線の状態。

目に見えて判る、自分の心が全く穏やかにならないことに、苛立ちを増していく閑人は、反面で、それも仕方ないと深い息をついた。他のことならばまだいい。

冷静さなど、すぐに取り戻せよう。

しかし、事悠風に関してだけは譲れないものがあつた。

焰もそれが判っていて、行きがけにあんなことを言ってくるのだから性質が悪い。

幻魔を嫌い、退治を願うくせに、彼の男はいつも閑人の神経をどこかで逆撫でしていた。

「……まあいいさ。それよりも今は幻魔だ」

ともすれば、焰への不平不満で終わりそうな思考を払い、青鈍の瞳を細めた閑人は、今度は別の人物を頭の片隅に置いた。

いや、実質最初からそこに、常に閑人の中にいる人物

「さつさと終わらせねエと、悠風が探しに来ちまいそうだしな」
来るな、待っていると言ったところで、短くもない付き合い。

どれだけ待たせてしまったなら、彼女が動いてしまうのか、手に取るように判っている閑人は、自分を呼ぶ甘い声の記憶に胸をむず痒くさせると、への字ばかりを描いていた唇に弧を宿らせた。

「さすが悠風。様様つか？」

元よりそのつもりだったのだから、辿り着いて当然。

しかし、悠風の名を呼んだと同時に、幻魔の宿主がいるであろう建物を認めた閑人はそうつぶくと、誘うように開かれたベランダの窓へ、ためらいもなく入っていった。

音も光も何もない室内。

我が物顔の土足でそこをうろつく閑人は、僅かばかりの光で事足りる瞳を巡らせると、怪訝に眉を寄せた。

「無用心だな、おい」

この”世界”の元となっているのは、現実の世界。

無音は仕方ないとしても、ベランダを開けておきながら、明かりが点いていない室内は、閑人の目から見ても普通とは言い難かった。幻魔の宿主の部屋だとしても、異様である。

そもそも、異形を身に飼う宿主だからといって、彼らの生活スタイルや考え方は他の人間やその常識とさほど変わらない。

こんな風に明かりも点けないで、ベランダを開けっ放しにするのが、宿主になる前からの常識だというのなら、話は別だが。それもこの”世界”とは違い、現実の、肌寒い秋の夜に。

「……………」

薄い紫の線が、間取りから推察するに、洗面所と思しき場所に向っている」と視認した閑人。

この”世界”と現実を繋ぐのは鏡であるため、洗面所から幻魔を誘き出せると踏んだ彼は、一先ず足を止めると、改めて誰もいない宿主の部屋を見渡した。

何階建てか数えるのが面倒なマンションの一室。

開放的なベランダの窓を背にすれば、だだっ広いリビングを挟んで、洒落たダイニングキッチンが見える。

その横奥には玄関や洗面所に続くだろう扉があり、手前右側の壁には扉が一つと一枚分空いた襖。

覗き込めば六畳ほどの和室と、押入れらしき襖が二枚。

目に付いた場所だけ見ても一家族なら丸々納まるだろう。

しかし

「広さや造りは立派だが……まるで売り家だな」

苦い顔をした閑人が、端的に宿主の家を評価する。

彼の言う通り、マンションの間取りや造りに申し分はない。

だがここには、人が生活している気配が全くなかった。

リビングにはくつろぐためのソファもテレビもなく、ダイニングキッチンには備え付けのカウンターと対応する椅子があっても、雑貨の類が一切見当たらない。

和室にしても少し日焼けした畳があるのみ。

閉め切られた扉を開けば、あるいは何か見つかるかもしれないが、それにしても憩いの場がここまで閑散としているのは異様だった。かといって放置している訳でもないらしく、定期的に掃除をしているのだろう、自然と積もるはずの埃はどの部屋にも見当たらない。なかった。

余程の潔癖症か、あるいは徹底して物を持たない主義なのか。それならそれで、こんな広い部屋を選ぶ必要もないだろうに。

(随分と薄気味悪いのに引っ掛かってんな、あの嬢ちゃん。ま、俺は俺の仕事をこなすだけなんだが)

どれだけ考えたところで理解できない宿主の暮らしぶり。

頭を振って払った閑人は、止めていた足を進めると、奥にある扉へ入っていった。

鏡の中の攻防 その3

悠風は走っていた。

どこまでも続く夜の中を、変わり映えしない無人の道を。

住宅街に点在する灯は明るく、しかし悠風が走る街には誰もいない。

この”世界”の中、悠風以外にいとすれば、それは閑人が幻魔か。

「ど、どこにいるの、閑人さん！」

いるはずの、どこにいるかは判らない男に向けて、少女の口から甲高い声上がる。

いい加減、悠風は疲れていたのだ。

”世界”の中の自宅から走り続けていた悠風は、それがいつから始まった行為なのか、既に覚えていなかった。

それくらい長い間、この夜の街を走っている。

だというのに、疲れたと言っても悠風にあるのは肉体的なものではなく、延々と似たような場所を横に流してきた精神的な疲労感のみ。

体力は未だに有り余っている状態だった。

静止した現実同様、人間である悠風の体力は、この”世界”にいる限り、入ってきた状態を維持したまま、磨耗せず延々と続く。

裏を返せば、悠風が疲労困憊だった場合、この”世界”にいる限り、その状態はどれだけ待っても回復しないことになる。

とはいえ、この”世界”の主である閑人が、そんな状態の悠風を此処に連れて来ることはなかった。

閑人が悠風を此処へ連れてくる時は、いつだって彼女を万全の状態にしてからだ。

夕飯を先にさせたのも、そのため。

悠風はもう一度、夜の闇に向けて、姿形のない者の名を呼んだ。
「ねえ、閑人さん、つたらあ！」

精神が疲弊し切っているせいで、甘ったれた声になってしまったのはご愛嬌。

ともすれば、遊び慣れた女が誘惑するに似たその呼び声は、しかして別の存在を招き寄せてしまう。

「ちいっ！ かくなる上は！」

「きゃあっ!？」

斜め上空より地に降り立った影が、悪態を付きながらも、悠風の身体を横から搔つ攫っていく。

腹に回された腕に、危うく「ぐえ」と押し潰された蛙さながらの声を上げた悠風は、両手を押さえることで何とか回避に成功。

しかし悠風の身体を抱えた相手は、そんな行動が気に入らないとばかりに、乱暴な手つきで彼女の口から両手を遠のけてしまう。

乗じて長い黒髪を結び上げていた紐が解け落ち、悠風の視界が少しだけ狭まった。

「殊勝だなあ、人間。だが、口を封じられちゃあ、情に訴える事も出来ん。……まあ、あんな奴に情なんてもんが果たしてあるのかは、さて置くとしても」

「う、わ……高っ」

「お前……この状況下でよくも呑気な」

一度の跳躍で遠くなる街並みに悠風が感嘆したなら、ざらざらした雑音混じりの低音が、半分呆れ返った口調で呟いた。

決してヒトに馴染まない声を耳にし、悠風の黒い瞳が自分を小脇に抱えた相手の姿を、ここに来てようやく視界に入れた。

「……某ライダーに出てくる怪人みたい。着ぐるみ？」

「中の人なぞおらんわ！ 全く、どういう神経しとるのだ、お前は！」

とはいえ、悠風がそう思ってしまうのも無理はない。

特定は出来ないものの、何かの昆虫を人型に象った緑色のその姿

は、どっからどう見ても特撮の範囲内。

後ろにチャックがあるかどうか、確認したくなるクオリティである。

だが悠風は軽口を叩きつつも、自分を抱える相手が本物の化け物であると知っていた。

(早苗さんの幻魔、よね？ ってことは閑人さん、まさか負け……ううん、でもこの幻魔、追われている口振りだったし。それなのにわざわざ私を小脇に抱えるなんて、人質のつもりなのかしら？)

生々しい虫の感触から目を逸らすように、悠風は現在の状況を考える。

此処に幻魔がいるということは、誘き寄せるのには成功したのだろう。

だが、珍しくも閑人は取り逃がしてしまった。

こそこそ対象を嗅ぎ回るストーカーの幻魔ゆえ、物陰に逃げるのが得意なのかもしれない。

しかし、閑人の幻魔退治に付き合わされて早十年近く。

時々危険な目に遭ってきたため、悠風には何となく判っていた。

どんなに逃げるのが得意でも、この幻魔は小者だ、と。

最終的には閑人に屠られる相手、人質に取られたところであまり危険はないと判断した悠風は、仰々しい溜息をついた。

「はあ。それにしても今時人質って。後手に回ったも同然じゃない？ 貴方の言う通り、閑人さんって情に薄い人よ？ 最悪、逃げ切れる攻撃を人質のせいではっきり、なんて事も」

「……よくこの状態でその様な事を言えるな？ せめて、助けて、と貧相に叫べんのか？」

「叫んで、もいいけどさ……そうすると貴方、もう後がなくなるわよ？ いや、まあ、この空間に誘い込まれた時点で、終わったも同然なんだけど。第一、叫んだりしたら私だって」

「この空間？……言われてみれば、何か違うな、此処？」

「え……今頃気づいたの？」

住宅街の屋根を飛び跳ねて移動する相手が、辺りを見渡す様を見て、続く言葉を忘れた悠凧の目が点になってしまった。

人間よりも優れた感覚を持っている幻魔。

通常なら、この空間に入った時点で何か可笑しいと気づくはずだ。なのに、この鈍さ。

「うわーい……さすがは早苗さんのストーカー。幻魔も鈍いんだ」

「？ さなえさん？ 何の話だ？」

「いえいえ、こちらの話です」

疑問符を散した割に、「早苗さん」というワードへ、幻魔がぐるんつと顔を寄せてくる。

気持ち悪い動きとあまりの近さに、悠凧は内心で悲鳴を上げつつ、昆虫の顔へは愛想笑いを向けると、両手を振って何でもないを示した。

幻魔は悠凧の反応を訝しむものの、はっと何かに気づいては、着地するはずだった屋根を蹴り、後方へと跳躍した。

刹那、幻魔が蹴った屋根の一角が、鋭い切り口だけを残して寸断されてしまう。

「ちいつ！ 来たな、世捨ての庵！」

「えっ！？ き、来たってもう！？」

得体の知れない得物の存在に、慄きながら幻魔が吠えた先。

それまで誰もいなかった、切られた屋根の上には、一人の男が立っていた。

長さがまちまちの飴色のざんばら髪に、ノンフレームの四角い眼鏡越しに輝く青鈍の双眸。

柄の悪さが滲み出る顔つきには凶悪なまでの苛立ちが宿り、軋む歯は人間のそれに比べてどれも鋭い。

渋い色合いの着流しから覗く身体は、顔に引けを取らぬ勇ましさ

で、屋根の上でも均衡を保つ下駄の足は、脚力を物語るように引き締まっている。

青年と呼べるほどの若々しさはないものの、どの齡に該当しても断定できない容姿と雰囲気は、ただただ男の性を物語るのみ。

目の前にいるのは紛れもなく、先程まで悠風が探していた、今最も会いたくない人物、影浦閑人。

「……よオ、悠風。てめエ、なあにとっ捕まっつてんだ？ あア？」

「か、閑人さん……」

そして怯える悠風を呼ぶ閑人の声は、彼を警戒する幻魔を丸つきり無視した剣呑さで、彼女の所在が其処に在る事を攻めていた。

即ち、幻魔の小脇に抱えられている事を。

経験上、不可抗力を訴えても聞き入れて貰えないのは判っている。

このため悠風は顔を青褪めさせると、視線は彼に囚われたまま、自分を抱える幻魔へ叫ぶ。

「わ、私をあの人に投げつけて！ じゃなかったら、どっかその辺に投げ捨てて！」

「は、はあ？ 何だっつてこの場面で人質のお前を」

「いいから、早く」

「人質、だと？」

幻魔を怒鳴りつけるために、一瞬、目を逸らしたのが悪かったのか、至近から届く閑人の声。

「何っ！！？」

「ひいつ、遅かった！？」

彼が発していた威圧感を間近に受け、悠風の眦に涙が浮かべば、彼女を抱えていた幻魔の胸に、下駄の足が自然な動きで添えられた。と同時に、吹き飛ぶ幻魔の身体。

悠風の身体に抱えた腕を留め置いたままで。

「いやっ……！」

黄色い飛沫を上げる腕の生温かい血が服越しの左脇腹に滲み、宙に浮いた事よりもそちらを恐れたなら、新たに悠風の身体を抱えた

別の腕が、身体を失った幻魔の腕をパシッと払い落とす。

千切れた腕を恐れもしないその動きに、悠凧が顔を上げれば、にやりと底意地の悪い笑み彼女を迎えた。

「人質、か。人選は間違っちゃいないが、そもそも相手が悪過ぎる。なア、そう思わないか、悠凧？」

「ひゃっ」

悠凧を腕にした途端、憤怒の相を綺麗さっぱり消し去った閑人は、ぞっとするほど甘ったるい低音を奏でて彼女を呼ぶと、涙の滲む眦に乾いた薄い唇を寄せた。

雫を啄ばんで離せば、仄かに上気する悠凧を認め、閑人が満足げに笑う。

しかし、当の悠凧は微笑み返す訳にもいかない。

彼女の身体を腕一本で支える閑人のその手が、器用に太腿を撫で回してくるために。

幾ら足の大半がベージュのスカートに内包されていても、長く節くれ立った手の艶かしい動きは、素肌を弄られているのと同様変わらない感覚を、悠凧にもたらししていた。

「や、閑人さん！？ 何を考えているんですか、こんな場面で！」

居心地の悪さに身じろぐ悠凧に対し、抱く腕を引き寄せて距離を縮めた閑人は、暖色のニットの先にある鼓動へ耳を寄せながら、心地良さそうに目を閉じ頬ずりをする。

「んー？ こんな場面ってのは……どんな場面だ」

「どっ、どんなって ふひゃあっ！ やだもっ、この人！ だから人質なんて嫌なの！」

幻魔の腕を引き千切っておきながら、すっかり悠凧の体温に興じる閑人は、どれだけ彼女が頭を遠ざけようとしても我関せず。

「いいじゃねえか、減るモンでもナシ。ご主人さまと下僕にゃ、こっとういっ触れ合いも大切だぜ？」

「減る！ 減ります！ 滅茶苦茶減りますから！」

「判った、判った。なら後で、元の大きさに戻るまでたっぷり揉んでやるからよ。しばらく黙っとけ」

「全っつっ然っつ、判ってない！ いいから離せ、このセクハラオヤジ！」

「お前……年齢の話は言うなよ。これでもナイーブな四十代後半だつてえのに。はあ、傷ついた。傷ついた俺の心はもう、悠風の胸でしか癒せねえなあ。それも真っ裸の」

「い、やあーっ！ 止めろ、変態、ロリコン、若作り！！」

「おいおい。最後のは別に悪口でもね おう？」

悠風の胸に顔を埋めながら、激昂する彼女とのやり取りを愉しんでいた閑人の顔が、突然、あらぬ方向を見やった。

一時休戦、つられて悠風もそちらを見たが、あるのはただ、閑静な住宅街の夜だけ。

(……ん？ 夜だけ？)

何かが引つ掛かって首を傾げた悠風。

程なく、ぼふっと閑人の頭がまたしても胸に寄せられるものの、今度は特に抵抗もせず、その頭を抱くようにして髪の毛のひと筋を指に巻きつけていく。

ざんばら髪の毛くせして、自分よりさらさらした髪質にちよっぴり嫉妬心を撥られたなら、そんな悠風の手を掻い潜った閑人の右手が、がしがし乱暴に頭を掻いた。

「あーらら。幻魔の野郎、こっから出て行っちゃった」

「……はい？」

飄々とした閑人の言葉に、悠風の理解が追いつくまで数秒。

その間に「しゃあねえ、今日は帰るとすっか」と呟いた閑人は、悠風を抱えた状態で、屋根の上から一気に飛び降りていく。

瞬間、閑人共々悠風の姿が宙に掻き消えたなら、残された街には静けさが戻り 否。

”世界”全体が、途方もない闇に喰われていった。

手負いの行く末 その1

閑人の招きを受けて迷鏡堂から”世界”へ移動すると、決まって”世界”の中の迷鏡堂前に入るのだが、実は本来、”世界”への入り口にそんな制約はない。

閑人なしで移動してしまった悠風が、見知らぬコンビニの前に放り出されたように、”世界”の中ならばどこへでも、迷鏡堂から移動することは可能なのである。

それが迷鏡堂に限定されているのは偏に、悠風の間接を感わせたくない、という閑人の思いからだ。

ただしこの思い、”世界”から迷鏡堂へ帰る時には、適用される事があまりない。

このため、
「たーだいまーっと」

一戸建ての屋根から飛び降りたはずの閑人は、忍者屋敷宜しく、迷鏡堂の天井板の一つを回転させて土間へ降り立つと、抱えていた悠風を続きになっている居間へ降ろした。

悠風の靴を脱がせては、自分も手前の踏み板に腰掛けて一息つく。

「いやー、仕事したなー」

「……どこがよっ!!」

膝に足を乗つけて頬杖をつき、しみじみ語る閑人に、それまで反応出来ずにいた悠風が食って掛かる。

渋い色の着流しの襟を掴んで引き寄せれば、「お？ どうした悠風？」とからかう口調が腹立たしい。

「幻魔よ幻魔！ 早苗さんの幻魔！ 仕事したって退治してないじゃない！ 逃がしちゃったくせに、どの口が仕事したって言うのよ！」

「どのつて……この？」

悠風の激昂を涼しく見守る閑人が、「う」の形に突き出した唇を

指差した。

「~~~~~っの、黙れ閑人！」

どこまでもふざけた閑人の態度に、襟を掴む手へより一層力を込める。

（幻魔が退治されなかったってことは、早苗さんはまだ、安心できないってことなのに！ 珍しくやる気になってたと思ったら、珍しく失敗なんて）

「……早苗さんに、合わせる顔がないよ」

脳裏に浮かぶのは、幻魔に悩まされてきた佳人の憂いと、「話を聞いてくれてありがとう」と笑う顔。

幻魔退治に悠風の出番はないが、寄せてくれた信頼を裏切るのは辛かった。

信頼していた閑人がしくじった事も、だというのにふざけた態度を取る事も許せない。

（でも、一番不甲斐ないのは自分。何も出来ないくせに、閑人を責めたりして馬鹿みたい）

それでも責めたくなってしまうのは、閑人自身のせいもままあるが、大半は悠風の甘えだった。

怒って詰って不満をぶつけても、閑人はそれら全てを受け止めてくれる。それが判っていて喚く自分が情けない。

襟を掴む力さえ沈む気持ちと共に緩んでいけば、頂垂れた頭が閑人の首元に落ちた。

すると慰めるように両肩に置かれる閑人の手。

顔を上げた悠風は、ノンフレームの眼鏡越しに真剣な青鈍の眼差しを見て、胸をドキリとさせた。

のも、束の間の事。

「ぎゃんっ!？」

何の前触れもなく、居間に押し倒される身体。

辛うじて頭は打たなかったものの、強かに打ちつけた背中と噛みそうになった舌に、悠風が顔を顰めれば、覆い被さってきた閑人の

手が、有無を言わず彼女の服の中へ侵入してくる。

「ちよつ、閑人さん!？」

直で素肌に触れてくる男の手に、危険を感じて身を起こそうとしても、悠風の両手首を片手で頭上に貼り付けた閑人はにやりと笑うのみ。

足を動かそうにも時既に遅く、膝の上に乗った閑人の尻は、体重こそ掛かっていないものの、十六の小娘がどうこう出来る代物ではない。

ほぼまな板の上の鯉状態に恐れ戦く悠風に対し、愉悦に満ちた表情をしながらも何も語らない閑人は、彼女の服の中に入れた手をするすると上に移動させていった。

時を置かず人工の光に晒されるのは、柔らかな丸みを帯びた薄青のチューブブラ。

首元で閑人の手が止まろうとも、暴かれた羞恥は悠風の唇をわななかせた。

かといって、これで終わりでもなく、返す手が今度は腰に移動してくる。

「やつ!？」

悠風は再度抵抗を試みるものの、捻った腰が逆にスカートの留め金を閑人に触れさせてしまい、呆気なく外されたそこから外気が入り込んできた。

悠風の目に涙が浮かんできても閑人の手は止まらず、スカートをずり下げては、ブラと同じ素材のショーツを露にさせる。

押さえつけられた状態で、次に何が来るのか判らない中、長い指がショーツの左端を下に追いやっていく感触が届いてきた。

「ひっ……!!」

恥ずかしさと恐怖に苛まれ、悠風の目がぎゅっと閉じられたなら、親指が今まで隠されていたショーツラインをなぞり　そして。

「ひ、ひゃ、うっ……ひゃ、ひゃひゃひゃひゃひゃあああああ

「っっ!!?」

両手を固定していた左手が頭上から去るやいなや、冷たくも生暖かいモノが左の脇腹を這い始め、それまでの危機感はどこへやら、悠風は身を擦って笑い出してしまった。

もう一方の脇腹に閑人の左手が下ろされたなら、悠風の笑いは更に強まり、収拾がつかない状態に陥っていく。

どうにかしようと、腹筋だけで上半身を起き上がらせても、

「ひぎゃっ、ぐっ、ふひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃっ！ ひよひひゃっ!!」

本日二度目の弱点攻めに、悠風の口から出てくるのは、おおよそ品が良いとは言えない笑い袋のような声のみ。

左の脇腹に顔を埋めた諸悪の根源・閑人は、そんな悠風には目もくれず、執拗に熱い吐息と唇・舌を這わせ、愛撫と評せる濃厚な行為を続けていく。

このままでは笑い死ぬ　　までは行かずとも、笑い過ぎで吐いてしまいそうだった。

閑人がソレの被害者になるのは「ざまあみる」だが、年頃の娘が人前でソレを行う精神的苦痛は計り知れない。

このため悠風は笑い続けながらも、抗議の手を必死に伸ばすと、閑人の飴色の髪を鷲掴んだ。

言葉が出てこないなら、行動で示せば良いと酸欠状態の頭で考えたからだ。

しかし、髪を掴んだは良いものの、そこに入る力は笑いのせいで既に奪われており、引っ張って止めさせるところか閑人の動きを促すていで撫でるばかり。

これに励まされる形で、肌を貪る蠢きが激しさを増したなら、悠風の喉からは嬌声染みた甲高い笑い声だけが、断続的に上がり続けていく。

乗じてビクビクと痙攣するように悠風が震えても、閑人は彼女の

脇腹から顔を上げず。

かくして閑人の顔が離れた時、そこには笑い疲れてぐったりした少女の、世にも無残で残念な姿だけが転がっていた。

手負いの行く末 その2

「う……ん？……………！」

気づけば前方に、古ぼけた天井の木目板を認めた悠風。

視界をぼんやりさせたまま、直前の出来事を思い出すと、寝転がりながら自身の現状を把握する。

上と下、ずらされた服はそのままに、晒されていたはずの下着姿には、閑人のもらしき羽織が掛かっている。

伝わる体温から、時はそう流れていないと知った。

かといってすぐさま起き上がることはなく、目だけで彼女をこんな姿にした男を探す。

簡単に見つけられた彼は、こちらに背を向けて、煙管キセルを片手に一服していた。

腹が立つほど余裕のある格好だが、悠風は小さくため息をつくと軽く首を振った。

その格好がどんな意味を持つのか、煙の出ていない煙管が何を示しているのか、全てを知っていればこそ。

「いい加減、喋んなさいよ、閑人」

「お、もういいのか。なら、さっさと服を脱げ」

さっきまで黙っていたのが嘘のように声を発した閑人は、掲げていた煙管をどこかへ隠すと、腕だけを後方に向けて悠風を指差してきた。

「……………第一声がそれってどうなのかしら」

ぶつくさ文句を言いつつも、羽織を押さえながら器用に、中途半端に剥かれた上と下の服を脱いだ悠風は、恨みを多分に込め、それを閑人の頭に投げつけた。

脱がさせた服を手にしながらも振り向こうとしない閑人は、再度腕を後方へ向けると、今度は悠風ではなく、年季の入った箆笥を指差した。

「で、着ろ」

「はあ……はいはい」

悠風はため息をつきながらも羽織に袖を通し、前を押さえつつ箆笥前まで移動。

引き出しを引いては、女給を髣髴とさせる薄紅の和装を取り出し、羽織の中でブラジャーを脱いだ。

閑人を背中にした悠風は、とさりと下着を落としても、彼が絶対振り向かないことを知っているため、長襦袢を着る時には羽織を先に脱いで、白い袖へ腕を通していく。

柔らかな二つの丸みを覆う際、悠風はその先にある左脇腹へ視線を落とすと、ちらり肩越しに閑人を見やり、投げつけた服の左脇腹付近をまじまじ眺める彼へ、再び呆れたため息をついた。

「それにしても、何だって急にあんな事？ そりゃあ、只人には害でしかない、幻魔の血のせいなのは判りますけど」

普段から傍若無人であろうとも、閑人は何も語らずに悠風を押し倒したり、まして彼女の服を剥いたりするような男ではない。

（まあ、黙っていたのは、私がその前に黙れって言ったせいなんだろうけど。でも、幻魔の血を拭うだけなら、手荒に扱わなくても良いはずよね？）

悠風に掛かった幻魔の血を、一刻も早く拭い取ろうとする閑人の行動は理解できる。

幻魔の血を浴びた人間は、それが服の上であっても、徐々に精神を侵されていくからだ。

侵された精神はやがて血を流した幻魔と同じ幻魔を作り上げ、元となった幻魔の手伝いを始める。

つまり、一人の宿主の欲を、二体の幻魔が援助する事になるのだ。方法は違えどゾンビ映画さながらの、厄介な事この上ない性質である。

しかも一度染み付いた血を拭うには、化生のもののような特殊な存在が必要不可欠であり、その方法は閑人が悠風に対して行ったよ

うに、一部の例外を除き、口で直接舐め取るしかない。

とはいえ、幻魔は元来、宿主が欲を叶えるまでは現実に己の身体を持つ事が出来ないため、血を浴びてしまう人間は限られてくる。

その限られた人間の一人に該当する悠風は、化生のものである閑人の答えを待ちつつ、薄紅の着物にも袖を通すと、帯を締めて着衣に乱れはないか、動いてもズレはないかと確認。

足元の羽織と下着を拾い、なおも背を向けたままの閑人の下まで行くと、「もういいですよ」と声をかけるため彼の肩へ手を伸ばした。

「ひいつ!？」

しかし、伸べた手が閑人の肩を叩く直前、質問に答ええない彼の手元が悠風の視界に入ってきたなら、彼女の手から羽織と下着が共に落ちていった。

それでも一心不乱に頭を上下に動かすことを止めない閑人、恍惚に震える眼差しで見つめているのは、手にした悠風の服であり、何度も口付け舌を伸ばしているのも、幻魔の血で汚れた彼女の服の一部分。

「か、閑人さん……?」

ぴちゃぴちゃニツト生地に絡む唾液の音と共に、ハアハア聞こえてくる荒い息遣い。

どの角度から見ても変質者でしかない行動を止めることも出来ず、涙を浮かべて青ざめるしかない悠風は、口元に手を当てて一つ後退した。

すると畳の擦る音は聞こえたのか、悠風の服を啜えた状態で振り返った閑人は、口の中からくちゅくちゅという湿った音を出すと、その唾をごくろ飲み込んだ。

そうして顔を前に戻しては口から服を離し、よだれ染みがついていない箇所へ顔の下半分を埋めると、未だ熱を帯びた青鈍の瞳をうつとり和ませる。

「脱ぎ立ての香り」

「~~~~つっ!!」

瞬間、ぞぞぞぞつと悠風の背筋を這い上がる悪寒。

左脇腹を直で舐められた時でさえ感じなかった気味の悪さに、更に悠風の足が遠のけば、これを目の端に捉えたのか、朱を滲ませた頬は依然として服に埋めたまま、くぐもつたため息が閑人から零れ落ちた。

「何だってあんな事、か。んなもん、決まってるだろ？ 幻魔のクソに人質として抱えられておきながら、俺に助けを求めるでもないしかも俺の姿を認めた途端、嫌がる顔ばかり。お仕置きの一つでもやらにや、オレサマの気が済まねェんだよ」

「……閑人さん」

ふてぶてしい態度は変わらず仕舞いだが、どこことなく拗ねた調子で語る閑人に、おぞましさを一時忘れて悠風が近づく。

だが、へそを曲げている男はそんな悠風の動きに対し、服へ顔を押し付け頬ずりすると、心底がっかりした声で言った。

「あーあ。全部悠風のせいだぜ？ お前が大人しく幻魔なんぞに抱かれたり、奴の生臭エ汁ぶっ掛けられたりしたせいで、オレサマ絶不調。しかも戻りゃ、奴の黄ばんだ体液塗れで説教と来る」

「~~~~つっ！ いちいち変な言い回しすんな！」

ほんの少しでも悪いと思った自分が情けない。

迷鏡堂という特殊な環境下、他者の耳には閑人の戯言が入らないとはいえ、聞き流せない内容に悠風の目が吊り上ってしまふ。

しかし服から顔を離れた閑人は、訝しむ目で悠風を見ると、純真無垢な子どもを装う首のかしげ具合で、更なる戯言を重ねてきた。

「お前、そんなにも奴が良かったのか？ 血を放置したという事は、奴の分身を孕むつもりだったんだろ？ やれやれ。若いつてのは怖いねェ」

最後には呆れ顔の首振りまで付ける始末。

これには一気に怒りで顔を赤くした悠風、彼女の服へ「なー？」と同意を求める閑人の横に立つと、息を大きく吸い込んで吐き出そ

うとした。

が、その前に。

「あのお、そろそろ宜しいでしょうか？」

「!?!?」

いきなり店の入り口から訪れる、第三者の苦笑混じりの声音。

そのせいで叫ぶための口を閉ざした悠風は、飲み込んでしまった空気の苦しさに咳き込んでしまう。

面倒くさそうにそちらを見た閑人は、「おお」と小さく零して軽く目を見張った。

「……そーいやお前、居たんだったな、焰。すっかり忘れてた」

「影浦殿……帰ってからも度々目を合わせていたくせに、それはないでしょう」

（ほ、焰さん……私も忘れてた　　って、え？　帰ってから、度々？　それってつまり　　）

咳をしつつ、二人の男の会話を耳にした悠風は、顔をさーっと青く変色させていった。

手負いの行く末 その3

踏み板に座った焰へ茶を出した悠風は、必要最低限の礼だけ取ると、居間に片膝を立てて応対する閑人の斜め後方へ腰を下ろした。逃げ腰に俯いた顔が赤いのは、幻魔を追っていた空間より帰ってきてからの間、焰の前で下着姿を晒していたと知ったためである。声を掛けられるまで気づけないほど、焰の気配が薄いとはいえ、大失態を演じてしまった。

後悔する悠風に対し、焰は墨色の短髪の下で目を閉ざしたまま、澄まし顔で茶を啜る。

そうして一息ついてから、閑人に背を向けた状態で喋り出した。

「百歳早苗の幻魔、取り逃がしたようですね」

「ああ。悪いか」

「ええ、かなり」

閑人の開き直りも何のその、ぱっさり断じた焰。

幻魔退治の帰りには必ずと言って良いほど顔を出し、成功だけを望む彼にとって、どんな理由があろうとも失敗は許せないらしい。

そんな感情など知ったことかと閑人が舌打ちすれば、焰はもう一口茶を含んでから首を振った。

「影浦殿。仕留めるからには一回で終わらせて下さらねば困ります。それなのに逃がすばかりか、一部欠損などと。ただ逃がすよりたちが悪い」

「……判っているさ、んな事はよ。つーか、てめえこそ”視”てたんならトドメさせ。お前ならあつちにも顕現出来るはずだろう？」
「それは出来ません。あなたの仕事はあなたの仕事。僕が口を出す範疇にはありませんから」

苦い口調の閑人へ焰は淡々と応じると、ネクタイのないスーツの肩を居間へ傾け、閉じたままの目で閑人の陰にいる悠風を”視”つめた。

「それに、どうせ”視”るなら女体の方が好ましい。勿論、トドメをさすのも」

口元を笑みで結ぶと、カッと顔を赤くする悠風にクツクツ喉を鳴らしていく。

「焰。てめえ、悠風に手エ出してみる。その目、全部綺麗にくり貫いてやる」

「やれ、剛毅な方だ。僕という男がいるというのに見せ付けといて、ねえ悠風殿？」

「う……」

悠風は気安く声を掛けてくる焰を恐れるように、更に身体を閑人の陰に隠していった。

とはいえ、そんな悠風の恐れだけでも十分愉しめたのか、口元を綻ばせた焰は残った茶を飲み干すと、再び背中を向けて口を開いた。

「手負いの幻魔ならば、しばらくは為りを潜めるでしょう。そして百歳早苗は勘違いする。ストーリーはいなくなつた、と。しかし、終わりはしない。それどころか、あなたが中途半端に手を出したせいで、幻魔ごと宿主は盛り上がるでしょうね。障害が多ければ多いほど、自分の世界に固執する。……否、自分”たち”の世界に執着すると言った方が正しいでしょう。あの手の輩は、相手を取り込んだ被害妄想が大好きですから」

「相手を取り込んだ、被害妄想？」

不思議な言い回しに、閑人の陰から悠風がおずおず問いかければ、再び振り向いた焰が嬉しそうに頷いた。

「ええ、そうです。自分”たち”という表現、あれは宿主と幻魔の事ではなく、宿主と百歳早苗の事を指しているのです」

「え？　なんで早苗さん？　だって早苗さんが言ってたんですよ？　ストーリー被害に遭っているって」

それなのに「自分たちの世界」に含まれるのが、早苗とストーリーとはどういう事なのか。

悠風が眉根を寄せて困惑すれば、下ろした瞼はそのままに、焰が

苦笑を浮かべた。

「ええ。でも、ストーカーの方は自分をストーカーだと認識しておりません。彼は自分を百歳早苗の恋人、もしくはそれに近い存在だと自負し、百歳早苗も自分を心から愛している　　と思っっています」
「それって……妄想、ってやつなんじゃ」

「はい、紛れもなく。しかし、彼にとつてはそれが真実、それが現実なのです。だから、相手を取り込んだ被害妄想に成り得る。この場合の相手とはつまり、現実の百歳早苗をモチーフに捏造された、彼の中の”百歳早苗”の事なんですよ」

「じゃあストーカーは、早苗さん自体が好きって訳じゃないのね。自分の思い描いた、自分の思い通りになる”百歳早苗”が好きなんだ」

「なかなか手厳しいご意見ですが、ええ、そういう事です。しかし百歳早苗は百歳早苗であつて、彼の”百歳早苗”ではない。そのズレは彼の中で彼女との関係が進めば進むほど、大きくなっていく」
「そつか。だからストーカー行為なんていう、滅茶苦茶自分勝手な行動に移るんですね」

「でしょうね。とはいえ、一概にそうとも言切れない輩もいますよ？　ほら、悠風殿専属のストーカーである僕とか」

「……は？」

けるつとした顔でいきなり不穏を吐く焰。

話の展開について行けず、悠風がピシッと固まってしまったなら、それまで二人のやり取りに、膝を土台として頬杖をついていただけの閑人が手を上げた。

「なあ？　独自の見解行き交うストーカー談義はそのくらいにして、さつさと本題に戻らねエか？」

「ふふふ。僕と悠風殿が仲良いからって拗ねちゃって。影浦殿つたら、かつわい」

甲側の手首に口を当て、焰がクスクス笑えば、怒るのはまたしても話を逸らされた閑人ではなく、

「だ、誰が焔さんなんかと仲が良いんですか！ さっきのはただの質問であって！」

「止めとけ、悠風。そこで前に出たら奴の思う壺だ」

「ぐぬぬ……っ！ だつて、だつて、閑人さん！」

「判った判った。後で聞いてやつからよ。今は大人しく俺の後ろに隠れてろ」

「……はい」

閑人の言葉に、立ち上がり掛けた足を渋々床に付ける悠風。

これに閉じた瞼の眉を上げた焔は、少々詰まらなさそうに唇を尖らせた。

「おや酷い。僕と悠風殿の睦み刻を邪魔するなんて。恋する二人の間には、何人たりとも入ってはいけない決まりなのですよ？」

誰がっ！ とまたしても憤る悠風に対し、手を伸ばした閑人は面倒臭そうにこれを制した。

「あーはいはい。そうやってすぐ、悠風の神経を逆撫でするな、焔からかうのは勝手だがな。さっき言った通り、コイツに手エ出したら」

「判っていますよ。ご主人さまと下僕の関係は複雑ですからね。ご主人さま思いの下僕に噛み付かれる前に、僕は退散させて貰いますよ」

「っ！ だ、誰がご主人さま思いの下僕よ!？」

さすがに我慢出来ないと言った立ち上がった悠風は、閑人の制止を払うようにその手を叩き落とすと、彼を指差して立ち上がった焔を睨みつけた。

「ケチつけなくってもイイとこじゃねエか。事実なんだからよオ？」

「どこがっ！」

閑人が何を今更といった調子で首を傾げたなら、焔から標的を変えた悠風が小さな犬歯を剥いた。

そんな二人のやり取りに、蚊帳の外に置かれてしまった焔が、不満げなため息をつく。

これにより焔の存在を思い出した悠風は、忘れていた事へ若干の罪悪感は抱くものの、元を正せば彼の要らぬ一言のせいである。

そのまま怒り顔で焔を睨みつけた悠風に対し、当の彼は閉じた瞼を閑人へ向けると言った。

「兎に角、です。勝負は宿主の中で幻魔が回復してから。僕の見立てでは一週間後、といったところでしょうか。影浦殿、お願いですから今度はちゃんと」

一旦切っては、今までの気安さを忘れたぞつとするような声音で続け様、

「殺しておいて下さいよ?」

明日の天気の話をするぐらい、軽い調子で焔は告げる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9371o/>

迷鏡堂の閑人さん

2011年10月7日08時10分発行